神国　第壱部～虚しき深淵より来たる者～

邪部そとみち

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト
http://pdfnovels.net/

注意事項

このＰＤＦファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にＰＤＦ化させたものです。
この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのＰＤＦファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】
神国　第壱部～虚しき深淵より来たる者～

【Ｎコード】
Ｎ８５２８Ｚ

【作者名】
邪部そとみち

【あらすじ】
◆１０年ほど前に自サイトに掲載していた物です。２０年以上前に参加していた創作同人サークルにて皆でキャラクター（オリジナルの神キャラクター）を出し合い、それを元に私が別ＰＮで執筆した物です。厨二病真っ盛りな内容で途中で執筆も中断しているのですが先日何となく懐かしくなって読み返し、黒歴史な恥ずかしい気持ちと、誰かに見てもらいたい気持ちがイイ感じで湧き起こってしまいこちらに掲載することにしました…◆「本編あらすじ」天地に数多くの神々が宿り人間や精霊達とともに暮らす異世界「神国」

ある時神々や人間の負の精神エネルギーから一柱の神が誕生した。誕生直後にその神は力を半減させられたが６００年後、自らの力の一部を偶然取り込んで錯乱した若神と出会い「神国」に反旗を翻す…。◆２０１２年の早い内に中断した続きを書きたい気持ちもあります。頑張りたいです…。◆２０１１年１２月２８日。キャラ設定や挿絵の挿入作業も並行して始めました。

＜序章・美しき広き郷＞

＜序章・美しき広き郷＞

照葉樹の密林は、降り注ぐ陽光と暖かな風をその身に受けて揺れていた。

森の中を吹き抜けていく微風は、年を経て節くれだった梢を揺らして行きながら、濃緑の森の香気に染められていった。

風に揺れる梢の他、動く物は何一つ無く、静寂と濃密な木々の香気だけが森の中を満たしていた。

メル・ロー大陸、ダイナ山脈の北の外れ。

天を覆い尽くさんばかりに生い茂っている照葉樹の密林は、人間はおろか、神々ですら訪れる事の無い場所だった。

風が吹く度に、空を埋める無数の葉は淡い緑のきらめきを放ち、日の光は柔らかに濾過されて地上に零れ落ちて行った。

そんな密林の奥底に、木漏れ陽を受けて鏡の様に輝く小さな湖があった。

その湖の浅瀬に、白い裸身を横たえている女神の姿があった。

淡い光すら眩しそうに目を細め、女神は長い時間、そうやって水に浸り続けていた。

濃緑の森の息吹を胸に吸い込む度に、女神の裸身は浮き沈みを繰り返した。その豊かな胸もまた、緑に染まった水面で上下した。

湖のすぐ側の大きな楠が、上半身に若草色の光の粒を纏い、下半身に薄い藍色の影をはいていた。

木々の茂みの切れ間から覗く空は、何処までも青く澄

み渡っていた。
だが、女神はいつしかそれらを見る事も忘れ果て――その全ての思考と感覚は、ひんやりとした水の中に消え失せていた。
女神はただ、忘我の境の中、光を浴び続けていた。
女神の命の全ては果てし無く澄み渡り、いつか、世界の全てと溶け合い漂っているのだった。
女神の体の奥から一つの温もりがこみ上げ、それは女神の細い喉を震わせる言葉と化した。
「――――ああ……、世界は美しい……。」
女神の呟きは微風の中に掻き消え、女神はゆっくりと瞼を下ろした。

◆

＞i３７９０６―４７５０＜
女神はこの世界の生まれた次の瞬間に誕生し、その時から永遠にも近い長さの命を生き続けてきた。
幾億の幾億乗、幾兆の幾兆乗――どれ程の年月を生きて、どれ程の数の命の営みを見続けて来たのだろうか。
常に過去を見つめ、世界の全てを見つめ続ける事が女神の司るべき宿命だった。
過去を振り返る女神の顔を見た者は誰もいない。
女神の名は「哀しみ」――ゴレミカと言う。

◆

森の何処からか、暗い風が吹きつける気配があった。
突然穿たれた小さな穴から吹いて来る、暗く冷たい空気。
それは、この森ではない――遙か遠く離れた異なった世界へと続いている次元の穴だった。
そこから吹きつける風はこの森の浄寂とひどくそぐわない、憎悪と怨念の喧騒を伴ったものだった。

ゴレミカは森の異変に気付くと、体を起こして岸へと上がった。
水に濡れてもつれ合った髪を拭き、頭の両端で結わえ直した。
次第に、不快な臭気が森の空気に混ざり始めているのをゴレミカは感じ始めた。
嫉妬や憎悪、恨みの叫び。それらは余りにも生臭い匂いを撒き散らし――ゴレミカの感覚を刺激した。
「！」
溢れ出る風は、次第に濃度を増し、渦を巻き始めた。
やがて、それらは一点に凝縮し、形を成し、意識を持ち――一つの命を持とうとしていた。
この森よりも遙かに遠く離れた世界から、その命は生まれ出ようとしていた。
太古――いや、それよりもずっと以前の、世界の原初の時代にゴレミカが誕生した時の様に。
しかし、遙かに禍々しく邪悪な神が、この世界へと生まれ来ようとしていたのだった。
傍らの木の枝に掛けておいた衣服を身に着けると、ゴレミカは精神を集中した。
女神の念の力は、その身を重力の束縛から解放した。
宙に浮かんだゴレミカの前を、一陣の疾風が駆け抜けていった。
風は互いに絡み合った木々の枝を掻き分け、ゴレミカの行く先を示して一つの道を作り出した。
禍々しい命の誕生しようとする気配が、道の彼方に、はっきりと感じられた。
この世界の秩序を乱すものに間違いない。
永い、永い年月を生きてきた女神の直感が告げた。
何としてもその誕生を阻止しなければならない。

ゴレミカは決然と顔を上げると、異世界からの空気の渦の中心へ向かって飛び立った。

◆

いつの時代の事か。
何処の場所の事か。
神々と人間と、あまたの命の生きる世界がある。
天と地と海とに幾多の神々が溢れ、人間と共に生き、日々を営んでいる世界がある。
その郷の名を――――
「神国」。
そんな世界の、これは神話――――

第1章「昏い処」

この世界に存在している一切の物質に内在し、その現象の全てを支配しているエネルギーがある。
そのエネルギーは無数の流れを形成し、世界を川の様に巡っている。
その場所は地下であったり、遙かな上空であったりする。その流れは、レイラインと呼ばれている。
レイラインは時に渦を作り、時に四方へと飛散する。
その地点は集束点と呼ばれ、特に生命力に溢れた土地となっている。
しかし一方で、レイラインは憎悪や怨念と言った負のエネルギーの流れも形成している。そうしたエネルギーは集束点から地底へと流れ込み、虚空と呼ばれる異界へと続き、その果てで浄化される。
だが、時に淀んだ流れの中から邪悪な神や魔物が誕生する事もあった。

◆

光とも煙ともつかない黒い物が激しい渦を巻く中で、無数の怨嗟と絶叫が響き渡っていた。
神々や人間達から吐き出された諸々の欲望や執念。
レイラインの流れに乗り、この地上ではない遠く昏い遙かな虚空の果てへと去り往くべきそれらは、本来の流れに逆らって地上に溢れ出そうとしていた。
犯したい。食いたい。壊したい。殺したい――――
もはやそれらは抱いていた者達から離れ、理性や常識の制約も受けず、純化された激しさと毒々しい輝きだけを垂れ流すのみだった。
やがて。

ばらばらに放出されていたそれらのエネルギーは、次第に一つの形を取ってまとまり始めた。
――……たい。……生きたい。
激しい欲望のエネルギーは、一つの言葉――一つの想念の絶叫としてまとまっていった。
――生きたい。……生まれたい！
暗黒の渦が絶叫の雷鳴を伴って、ただ一点へと収束した。
濃緑の光と香りに満たされた、森の浄寂の風景へ、一筋の亀裂が走った。
次元に穿たれた暗黒の穴を押し破り、黒血を思わせる闇が滴り落ちた。
常緑の下草に覆われた地面を汚す闇の血を先触れに、漆黒の煙を噴き上げながら、その者はこの地上へと産み落とされた。
それぞれがばらばらに渦を巻いていた欲望と執念のエネルギーは、一つの「我」を持つ存在として結晶した。
――「我」……「我」は、レウ・ファー。
虚空の深淵へと沈むべき、神々や人間の欲望や執念から生まれた神。
闇よりも尚、昏く深い虚空の流れの中から独り、成り生まれた神。
そして、地上の神々と人間の営みから遙かに離れた彼方から来た神。
球状の脳と、それを覆う無数の触手。前頭葉から覗く一つの眼球。それがレウ・ファーの姿だった。
「私は、生きたい。」
己を形作った欲望そのままに、レウ・ファーは生まれて初めての言葉を紡ぎ出した。
言葉の響きと同時に、レウ・ファーの脳裏には、自ら

の生命の素材となった欲望や執念に、残滓の様に付随していた様々な知識や感情が入力されていった。
そうした知識は、前頭葉の眼球を通じて入ってくるこの森の中の様子を凄まじい速度で意味付けしていった。
だが、レウ・ファーがこの世界全てを理解し、自らの存在を理解し切るには余りにも情報が乏し過ぎた。
「欲しい。」
世界を、自分を理解する情報を。
世界そのものを。
＞ｉ３７９０８―４７５０＜
「何が欲しいのですか？」
未だ森の中に漂う昏い気配を打ち払う様に、ゴレミカの澄んだ声が響きわたった。
自分へと向けられた声に反応する行動は、まだレウ・ファーの中に確立されてはいなかった。
なニガほシいノデスか。ゴレミカの呼び掛けも、まだ音声の組み合わせに過ぎなかった。
ゴレミカはその神の余りの無反応ぶりに、暫くの間当惑した。
――森。緑。光。空気。水。虫。鳥。木。花。
レウ・ファーは触手をうねらせながら、暫くの間宙を漂っていた。
ゆっくりとした回転をしながら、眼球は辺りの景色を眺めていた。その瞳に捉えられた様々な物や現象は、瞬く間に分析され、整理されていった。
僅かの時間の内に、驚くべき速度でレウ・ファーの自我は構築されていったのだった。
レウ・ファーは初めて、近くに佇む後ろ姿の女神へ目を向けた。
「オマエ――お前。……そうか。お前は私ではないのだ

な。――ここの全てのものは私ではないのだな。」
自己の認識と確立。それは、この世に生まれ落ちた者が最初に陥る絶望だった。
我と彼。自分と自分でないものの認識――この世に生まれ落ちる前、世界は彼我の区別も無く、「私」は世界の全てと等しく、世界は「私」そのものであった。
「私は、欲する。」
欲望の宣言は、レウ・ファーにとっての産声だったのだろうか。
この世に誕生し、「私」は世界から切り離されてしまった。
私と、私ではない者達。世界はあまりに巨大で、不可解で、広大なのに――そこから切り離された「私」は余りに小さ過ぎる。
自己の拡張――己の周囲を認識し、理解していく事は「私」と世界との再合一に他ならなかった。
世界が再び「私」となり、「私」が再び世界そのものとなる為に。
「私は、欲しい。」
世界を、自分を理解する情報を。
世界そのものを。
「あなたは……。」
繰り返される呟きにゴレミカは戦慄した。
この神が何を望むのか、何が欲しいのか。
あまたの命の営みを見守り続け、永遠にも近い遙かな時間を生き続けてきた哀しみの女神は、この目の前に浮遊する脳髄の神の願いを理解した。
意識ある全ての存在が抱く根源的な絶望と欲望は、しかし、虚空の暗黒の流れの中に晒され、余りにも異質で邪なものへと歪んでしまっていた。

「私は、欲しい。」
レウ・ファーは、周囲の木々や地面に幾筋かの触手を伸ばした。赤味がかった細い管は先端から透明な粘液を滴らせ、木の肌や石の表面に付着するとそこから変質が始まった。
触手の食い込んだ木や岩は、無数の血管の様な筋を表面に浮かび上がらせていった。
すぐにそれは、金属的な光沢を帯びた肉塊へと変化した。
「何と……言う事を！」
ゴレミカは驚きよりもむしろ、哀れみに満ちた声を漏らした。
＞ｉ３７９０７―４７５０＜
「オマエもワタシになれ。」
触手の一本がゴレミカへ向けて放たれた。
よけようともせず、ゴレミカは舞う様な優雅さで手を上げた。
白く繊細なその掌中にあったのは、澄んだ光を発する宝珠だった。
宝珠の輝きに阻まれ、襲い来る触手は稲光を撒き散らして消滅していった。
「……哀れな、虚空の地平から生まれ来た神よ……！」
透き通る様な二つの繊手が花の様に広げられ、尚も繰り出されて来る幾本もの触手に向けられた。
繊指の間には、小振りな宝珠が輝いていた。
宝珠術――念を込めた宝珠により、様々な現象を発現させる技術だった。非力なゴレミカの最も得意とする技だった。
「あなたの、その命の在り方は、この地上を破滅させるのです……。」

ゴレミカは手を振り上げ、踊る様に宝珠を放った。
手を離れた瞬間、辺りの空気は宝珠の放つ無数の色彩で溢れ返り、レウ・ファーを取り囲んだ。
前頭葉の眼球が一瞬痙攣し、血走った目が剥き出しとなった。
レウ・ファーはその時、恐怖と驚愕という感情を学習した。
抗う間も無く脳髄の神は、宝珠の光が形成する輝く檻の中に捕縛された。
「苦しい。」
光の檻の中で触手がのた打ち、脳髄は収縮と怒張を繰り返した。
「その苦しみも、すぐに終わります……。」
光の檻の前で、ゴレミカは幼な子を諭す様に囁き、懐からもう一つ宝珠を取り出した。
「封印の中で、永遠にお眠りなさい……。――夢も見ない程に深く……。」
ゴレミカの囁きに反応し、宝珠に光が宿った。
「オォォッッ――！」
レウ・ファーは自身ですら未知の力を振り絞り、檻の中であがいた。
檻の外へとはみ出した触手を通じ、まだレウ・ファーと繋がって変質した木々や岩が更なる変化を始めた。
木や岩だった肉塊に、巨大な瞳の様な模様が次々に浮かび上がった。
電子回路を連想させる金属の筋が肉の表面を縦横に走り、動物の様な伸縮を始めた。
それは新しい命を得たかの様に動き始め、肉の管と変わり果てた木の枝をゴレミカへと叩き付けた。
微風を受ける様に悠然と、ゴレミカは僅かな動きで管

を躱した。
「ォォ――ォッッ――！」
変質した木々や岩だった肉塊は、更に周囲へと肉の管や触手を伸ばしていき、辺りを赤黒い金属質の肉塊へと変えていった。
脳髄の神は絶え間無い伸縮を繰り返し、檻の外の肉塊に命令を送った。
宝珠を一つでも砕けば檻は破壊出来る。
そう分析したレウ・ファーは、木の原型を留めない程に変質した、蛇の様な肉の管を宝珠に絡み付かせた。
「いけないっ……！」
宝珠に絡み付いた肉の管が小刻みに震え、打ち砕こうと力んだ。
慌ててゴレミカが封印の宝珠を投げ付けたと同時に、宝珠の一つが砕け散った。
光の檻に亀裂が生じ、その隙間をめがけて内と外から無数の肉の管と触手がたかっていった。
レウ・ファーが、こじ開けた穴から急いで這い出た瞬間、封印の宝珠が崩れかけた光の檻に衝突した。
まばゆい白光が森の中を走り抜け、辺りは一瞬、白銀の閃光の中に呑み込まれた。

◆

光の退いた後、再び森の風景が甦った。
一つ目の脳髄は、力無く下草の上に横たわっていた。
そのすぐ上には、掌程の大きさの妖しく輝く球体が浮かんでいた。
闇の色そのものの、漆黒の輝き。
それは心臓の鼓動を思わせる点滅を繰り返していた。
脳髄の神そのものの、昏い気配を辺りに撒き散らしながら、その球体はレウ・ファーの元へゆっくりと下降し

ていった。
その球体――神の生命力、神霊力そのものの結晶、神霊石は、再びレウ・ファーと同化すべく脳髄の中へと溶け込もうとしていた。
「……せめて、神霊石だけでもっ……！」
閃光に眩んだ目を押さえながら、ゴレミカはレウ・ファーの許へ歩み寄った。
ゴレミカの放った封印の宝珠は失敗し、レウ・ファーから神霊石を分離させるだけに留まったのだった。
「ァァッッ！――ッッ……！」
絞り出す様に呻き声を上げ、レウ・ファーは頼り無げに神霊石へと触手を伸ばして縋り付いた。
「しまった！」
ゴレミカも慌てて漆黒の神霊石へと手を伸ばした。
「くッ、来るなァァっっ！」
レウ・ファーは残された力を振り絞り、まだ自分に繋がっている周囲の肉管をゴレミカへと叩き付けた。
「きゃぁぁっっ――！」
背後から力任せに殴り倒され、灌木の茂みにゴレミカは頭から突っ込んだ。
服に絡み付く木の枝を掻き分けて、這い出ようともがくゴレミカへ肉の管が更に襲い掛かった。
ゴレミカは瞬く間に体の自由を奪われてしまった。
「――これは、私の…物だ……。」
脳が震え、喘ぐ様な声がゴレミカの耳に届いた。
レウ・ファーはゆらゆらと宙に浮かび上がり、己の神霊石へと覆い被さった。
神霊石は微細な震動を始め、じわじわとその輪郭を失っていった。
その変化に気付き、ゴレミカは焦りを覚えた。

細い腕が、赤黒い肉管に締め付けられた中で懸命にあがいた。
「うぅっ……。」
そうする内に、衣の懐から幾つかのきらめく粒が、地面へと零れ落ちていった。
落とすまいと手を動かし、ゴレミカが辛うじて掌中に留めたのは「爆発」を起こす宝珠だった。
自分の神霊石の吸収へと注意を奪われたのか、ゴレミカを絡め捕っていた肉管の力が幾分緩んだ。
見ると、啜る様に震える脳髄の中に、神霊石が半分近く呑み込まれようとしていた。
「！」
管に腕の動きを阻まれて投げ付ける事も出来ず、ゴレミカはボーリングの要領で宝珠をレウ・ファーへと転がした。
緩やかな動きで、ささやかな一筋のきらめきは、脳髄の神へと迫った。
貪る様に神霊石を啜る彼の神は気付きもしなかった。
脳髄を取り囲んだ触手のうねる間近に宝珠が到達した時、ゴレミカの念を受けて爆炎が巻き起こった。
「――ギァァァ、……ッッッ――ォォッッッッ！」
絶叫と悲鳴が、炎と共に飛散した。
べしゃっ、と湿った重い音が何処かの岩肌に叩き付けられた。
それからすぐに別の方向から、小さな何かの塊が地面へと落ちる音がゴレミカの耳に届いた。
主からの指令を失い、もはや身動き一つしない醜い肉の塊に成り果てた管を振り解くと、ゴレミカは音の起こった方向を目指した。
ゴレミカが暫く歩くと、先程の爆発で吹き飛ばされた

神霊石は、濃緑の下草の上で、闇そのものの様な漆黒の輝きを放っていた。
その辺りにはまだレウ・ファーの浸食は無く、清浄と静寂に支配された森の風景があった。
神霊石の闇の輝きは、しかし半分に損なわれていた。
「こっ、これは……！」
レウ・ファー本体へと吸収半ばで引き離された神霊石は再び物質化していたが、それは丁度、ガラス玉が砕けたかの様に半ばから欠けた姿を晒していた。
ゴレミカは急いでそれを拾い上げた。
心の底から絶望と虚脱に冷え切っていく様な、あるいは怨念と憎悪に焼き尽くされていく様な感覚が、ゴレミカの指先を刺し貫いた。
あの神は何処へ？
欠けた神霊石を抱え、ゴレミカは辺りを見回した。
――レウ・ファーの姿は、神霊石のあった場所からやや離れた木立の中にあった。
照葉樹の若木が幾本も根を食い込ませた岩肌に、黒い血と半透明の真紅のゼリー状のものが糊塗されていた。
緑と土の色の濃淡で築き上げられた森の光景を汚すかの様に、闇と血の撒き散らされた中心に一つ目の脳髄はあった。
「もう――お眠りなさいね……。」
尽きる事無く懐から宝珠を取り出し、ゴレミカは再び封印の為の宝珠を手に身構えた。
「――ォォォォッッッ！……ォォォォッッッ！」
ゴレミカの姿を認め、レウ・ファーは血走った眼球を極限まで見開いた。
半ば脳の形は崩れ、半透明の中身が漏れ出していた。
レウ・ファーは残された力を振り絞り――空高くへと

飛翔した。
逃げるレウ・ファーへと、森の木漏れ陽を受けた八つのきらめきが追いすがった。
――だが、触手へと触れる寸前で、宝珠は地面へと失速した。
「――ああ……何と……っ！」
ゴレミカは落胆の声を上げた。
脳髄の神の姿は紺碧の空へと遠ざかり、鮮やかな青い色彩の中の暗黒の一点と化した。
それはすぐに霞み――空を渡る微風に洗われたかの様に、何処へともなく消え去ってしまった。
後には落胆に立ち尽くす女神の後ろ姿と、主を失って壊死をし始めた肉塊と管の山が残された。
ゴレミカは知らず、あの神の神霊石を強く握り締めていた。
再び掌を襲う、刺す様な感覚に視線を落とすと。
ひたすら深く、黒い石の輝き。
触れているだけで、掌が黒く染まっていくかの様な錯覚があった。
この地上の世界ではない、遙か彼方の、昏く何処までも深い地平へと続くべき黒。
虚空の深淵の、全ての尽き果てた場所へと押し流される筈だった諸々の昏い想念の一掬い・・・・
そこから、あの禍々しい脳髄の神は生まれ出た。
他の命を・・世界の全てを侵し、蝕もうとする剥き出しの・・余りにも純化された欲望と執念の結晶。
彼は、この地上に来るべきではなかった。
神霊力が半減したとは言え、やがてこの地上に災厄をもたらす存在になるかも知れない。
ゴレミカの懸念は六百年後、現実のものとなった。

第2章「兆候」

六百年後、メル・ロー大陸、ダイナ山脈。
天と地と海とに幾多の神々が宿り、世界にはあまたの命が日々の営みを変わらずに繰り返していた。
神々の命の営みと共に流れる悠々たる時間に、世界は支配されていた。僅か六百年の時間は、世界に微々たる変化しか与えてはいなかった。
ダイナ山脈も然り。
地下にマグマの流れを有する、峻厳たる神々の山の連なりは、あちこちに豊かな温泉の恵みを変わらずにもたらし続けていた。
里に近い山裾には温泉宿が幾つも栄え、神々や人間が湯治に訪れていた。
中でもダイナ山脈の南端は、灼熱の山々を司る灼熱神バギルの神殿があり、大きな温泉郷として栄えていた。

◆

その夜バギルは、自分の久方振りの帰殿を喜ぶ神官や親神達の設けた宴席を抜け出して、神殿の麓の温泉宿へと向かっていた。
真紅の衣を纏ったしなやかな肉体。強い意志の漲る朱色の双眸。
獣の様な敏捷さで崖を駆け降りる様は、炎の矢が走り抜けたかの様だった。
灼熱神バギル――活火山を擁するダイナ山脈の化身、灼熱の炎を司る若き神だった。
＞ｉ３７９０９―４７５０＜

◆

暫くして、バギルは神殿の麓のホテルへと到着した。

ホテル「ヴィラ・ディアイラ」・・神殿の麓で営業している温泉宿の一つだった。
「待たせたな！」
湯煙の立ち上る露天風呂に、引き締まった体が飛び込んで来た。
勢い良く湯と煙とを巻き上げた後、バギルは広い湯船に横たわる様に身を沈めた。
「もおっ！もっと静かに入ってよー。」
湯の飛沫の直撃を受け、べったりと髪が張り付いた顔がバギルを見た。
「悪ィ、悪ィ。」
悪びれもせずに笑い、バギルは体を起こした。
浅黒い筋肉質の肌を、赤く濁った湯が滑り落ちた。
拗ねた様に口を尖らせる、僅かに年上の幼馴染みの前髪を掻き上げてやると、人の良さそうな細い糸目と第３の目が現れた。
額に第３の目を頂く神はそう多くはない。
ヒウ・ザード――彼は幻神と呼ばれる、幻を司る神々の内の一柱だった。彼ら幻神は、額の瞳で神々や人間に幻を見せ、惑わせる能力を持っていた。
「ザード、そんなに怒るなって！」
バギルは再度笑い掛けた。
ザードは拗ね続けているらしい表情で、バギルを軽く睨んだ。
だが、穏やかに笑っている様にしか見えない糸目のせいで、全く迫力に乏しかった。
ザードは睨む事を諦め、自らもまた横たわる様に湯の中に沈み込んだ。
バギルよりは幾分細く痩せ気味の体が、赤濁の湯の中を見え隠れした。

「ホントに久し振りだねー。」
湯の温もりに心地良さそうに息を吐き、ザードは話し掛けた。
「……半年振りか。」
ふと、バギルは遠い目をした。
バギルは2年程前から、冥王ヴァンザキロルの下に弟子入りし、冥界で武術の修行に励んでいた。
冥王の桁外れの強さに惚れ込んだバギルが強引に弟子入りしたのだが、冥王も武術指南の真似事は満更でもないらしかった。
半年に一度休暇をもらい、バギルはダイナ山脈南端の自分の神殿へと帰省するのが習慣となっていた。
「あっと言う間だなぁ……。」
この半年間の修行を思い返し、バギルは溜め息をついた。
――そこに。
不意に、小さな揺れが辺りを襲った。
湯が俄に波打ち、周りの岩を叩いた。
「地震？」
ザードは不安げな表情で周囲を見回し、バギルの腕を掴んだ。
だが、揺れはすぐに治まり、再び辺りに静けさが戻って来た。
僅かな間を置いて、今の地震について心配は無いという旨のホテルの放送が流れ始めた。
放送を聞き流しながら、バギルは露天風呂からも眺められるダイナの山並みへと目を向けた。
夜の闇に沈む峻険な山々は、三つの月と星々のささやかな光を受けて茫洋と浮かび上がるのみだった。
「そういや、最近変な地震が多いってウチの神殿の連中

が言ってたな。」
火山帯が地下を走っている為、ダイナ山脈の近辺は地震が多い事でも有名だった。
だが、灼熱神の知覚は、火山活動の気配を微塵も捉えてはいなかった。
彼の見立てでは、ここ四百年程は小さな噴火すらこの地では起こらない筈だった。
「大丈夫だよ、ね？」
ザードはまだ不安気な表情でバギルを見た。
小さな地震の一つで首を傾げている灼熱神の様子に、漠然とした不安を感じていたのだった。
「――おうっ！この俺様が保証するぜっ！」
自信に満ちた笑みをザードに向け、バギルはザードの頭から湯を浴びせかけた。
「なっ、何するんだよぉ！」
湯船から立ち上がり、情けない声を上げながらザードは尚も浴びせられる湯から逃れようとした。
「――もぉっ！」
子供染みた動作で腕を振り回し、ザードはバギルへと反撃を始めた。
「――きゃぁぁっ！」
不意に、彼らの背後で小さな悲鳴が上がった。
「……ごっ、ごめんなさい……。」
ザードが慌てて振り返ると、二人の入る湯船の近くに設けられた通路にまで、湯の飛沫が飛び散っていた。
ザードが更に顔を上げると、ずぶ濡れになった女性の姿が目に入った。
「……あれ？ゴレミカ…様？」
湯に濡れた顔を掌で拭ってバギルが目を向けると、見覚えのある後ろ姿が佇んでいた。

腰まで届く、緩やかに波打つ豊かな髪。頭の両端でそれを結わえた、古式の文様を刻印した髪飾り。
ただ、この日は珍しく宿の浴衣を身に着けていたのだが。
「すみません、大丈夫ですか？」
ザードは浴衣の裾から湯を滴らせるゴレミカを心配そうに見上げた。
「ええ……、お気遣い無く。」
過去と哀しみの女神は別段取り乱した風も無く、穏やかに応えた。
もし顔がこちらを向いているのであれば、優雅な微笑を浮かべているに違いない。
「珍しいなぁ。湯治っスか？」
余り礼儀をわきまえているとは言い難いバキルの問いにも、ゴレミカは気分を害した様子も無かった。
「ええ……。暫く静養に。――とてもいい土地ですね、ここは……。」
微笑んだのだろうか。
空気が柔らかに震える気配があった。
「それでは。」
「あ……ども。」
やはりゴレミカは後ろ姿のまま、ゆったりとした歩みでバギル達から遠ざかっていった。

◆

「なーんか、匂うぞっ。」
バギルは食事を終え、ロビーへと歩く途中で立ち止まった。
「何がぁ？」
その横でザードは不思議そうにバギルに尋ねた。
「あのゴレミカが里に滞在するなんて滅多に無い事だぜ

っ！絶対、何かあるっ！」
　ゴレミカは常日頃から他の神や、ましてや人間の前に姿を現す事は滅多に無かった。住所は神国神殿となってはいるものの、そこですら姿を見る事は殆ど無いといってよかった。
　ゴレミカの滞在目的をあれこれ推理している幼馴染みを横目で見ながらザードは小さく溜め息をついた。
　バギルは何か事件があったらそれに首を突っ込みたいだけなのだろう。
　ゴレミカの部屋番号を尋ねにフロントへ足を向けたバギルの後を、ザードは呆れながらもついて行った。

◆

　受け付けで尋ねたところ、ゴレミカは外出したと告げられた。
「――行き先ですか？そうですねえ。よく山の向こうに出掛けておられる様ですが……。」
　受け付けで話を聞き、バギル達は早速宿の裏庭へとやって来た。
　裏庭にはよく手入れの行き届いた植え込みから、原生の山林へと続く遊歩道があった。それはまた、ダイナの山々へと続く道でもあった。
「ねぇ、もぉ帰ろうよぉ……。」
　ザードの訴えも、好奇心と野次馬根性の塊と化したバギルには届かなかった。
「大丈夫、大丈夫！」
　一体、何が大丈夫なのだろうか。
「ほらっ、早く来いよ！」
　仄暗い照明に浮かび上がる山道を、早くもバギルは駆け上がり始めた。
「はいはい……。」

＞ｉ３７９１０―４７５０＜

ザードは肩を落とし、呆れた様に息を吐いた。

バギルの俊足に追い付くべく、ザードは飛翔型の幻獣を召喚して跨がった。

幻獣――それは幻神がその能力をもって創造する疑似生物だった。

不規則な楕円や流線から構成される幻覚的なデザインを持つその創造物は、主の思念によって誕生し、その命令に絶対の服従を行った。

一度創造された幻獣は、破壊されない限り異次元空間に保管され、主である幻神の求めに応じて地上へと召喚されるのだった。

およそ飛ぶ事とは無縁としか思えない、胴体よりも遙かに長い突起を幾つも伸ばし、幻獣は主を乗せて羽ばたいた。

奥へ進むにつれ、小綺麗に整備された石段は獣道へと変わり、足元を照らす照明は下界へと遠ざかった。

この名前ばかりの道が、現在では殆ど使われる事のない、昔の街道の名残だという事をザードは知る由も無かった。

冥界での鍛練の賜物か、月明かりが僅かに差し込むだけの山道を、バギルは苦も無く駆け抜けていった。

呼吸一つ乱れていない様子に、ザードは感心した。

と同時に、疑問や驚嘆がない混ぜになった感情をザードは抱いた。

あのたおやかな女神は本当にこの道を進んで行ったのか？・・事実であれば、女神の能力に驚かずにはいられない。

暗がりでよくは分からなかったのだが、山を一つ越えたと思われる場所で、バギルとザードは一つの立て札を

目にした。
『過去と哀しみを司る、我が名はゴレミカ。この名の下に、これより先への立ち入りを禁ずる。』
照明も無い夜の山中で、大きな金属板に刻印された文章だけが、妖しい光を放っている様だった。
何かしらの呪力が封じ込められているらしい文様と文章は、心理的な圧力を掛ける為の一つの装置だった。
「ゴレミカの使用地か。」
バギルは立て札の威圧感に臆した様子も無く、更に奥へと続く道を眺めた。
ダイナ山脈一帯は灼熱神の領地となっていた。
勿論、領地といっても独占している訳ではなく、山中には様々な神々や精霊達が住んでいるし、幾つかの集落もあった。
また、ダイナ山脈に限らない事だが、幾つかの場所についてはゴレミカの様な位の高い神が、何かしらの理由があって特権的に使用を認められていた。
大抵が、地上に害をなす存在――邪神や魔物などの封印に関連していたのだが。
「ねぇー、もぉ帰ろぉよぉーっ。」
立入禁止の立て札に怯え、ザードは幻獣の上からバギルの腕を引っ張った。
「――そうだな……。でも、折角ここまで来たんだし、もうちょっと奥まで見ていこうぜ。」
好奇心の塊と化した幼馴染みに、ザードは肩を落とした。
こういう高位の神々の特権的な使用地と言えば、魔物の封印場所と相場が決まっている。
一体どんな恐ろしい存在が封じられているのか分かったものではないのに。

内心あれこれと文句を並べ立てながらも、ザードは幻獣ごとバギルの背中にくっついて離れようとはしなかった。
ザードの怯えは長くは続かなかった。
立て札を越えて暫く行くと、夜の闇の中を横切る淡い光の帯が二人の目に入った。
ゴレミカの施した結界の光の壁だった。
「もぉ、これ以上は進めないね。」
ザードはほっとした様に息を吐き、バギルを見た。
だがザードの糸目に映じたのは、先刻までの好奇心に満ちた野次馬ではなかった。
「――この封印、弱まってるぜ……。」
バギルの真剣な視線が光の壁に注がれていた。
綻び、弱まり始めていた結界壁のエネルギーの様子と――壁の内側と外側から流れてくる禍々しい気配が、バギルの知覚に捉えられた。
結界の内側から漏れ出している邪悪な気配に惹かれて来るのだろう。
誘蛾灯に惹かれる羽虫の様に、結界の綻びを目指して這い寄るものの気配があった。
「……！」
バギルは庇う様にザードを背後に押しやった。
幼馴染みの真剣な表情への変化に、ザードも覚悟を決めた。・・やれやれと、一つ溜め息をついた後に。

◆

下草の茂みを割って木々の間を歩いて来る音がした。
何か鱗の様なものに覆われているのだろう。それが歩みを進める度に、硬質の金属が擦れ合う様な響きが起こっていた。
結界の柔らかな光を受け、暗い無数のきらめきを纏っ

た獣が姿を現した。
普通の獣には似つかわしくない、破壊と殺戮を渇望するぎらぎらとした目の輝きが、それが魔物である事を物語っていた。
「へえっ？仲々大物がやって来たじゃねえかぁ？」
半ば楽しむ様な感情がバギルの声に滲んでいた。
「お前はここを動くなよ！」
バギルの言葉にザードは大きく頷いた。
先手必勝。
魔物はそう判断したのか、牙までも鱗に覆われた口を開き、バギルへと襲いかかった。
きらめきをまとった斬線が宙を走り、魔物の牙がバギルへと炸裂した。
「！」
衣服一枚を裂けさせるに留めて身を躱し、バギルは炎の矢を放った。
――が、灼熱の矢は鱗の表面を僅かに焦がしただけだった。
再びバギルへと向かって来るかと思われたが、魔物は唸り声を上げて結界壁へと突進して行った。
バギルへの殺戮よりも、邪気へと惹かれる本能が勝ったらしかった。
鱗に覆われた拳が光の壁を叩き続けた。
「ちっっ！」
バギルは何度か炎の矢を放った。
しかし炎は空しく魔物の鱗を撫でるのみで、既に魔物はバギル達の事など忘れ果てた風だった。
魔物は声一つ上げる事無く、ひたすらに結界壁を殴り続けていた。
そうする内にも、壁の一部に歪みが生じ・・魔物の拳

が壁の向こうへとめり込んだ。
バギルの表情に焦りが走った。
このまま結界を破壊させる訳にはいかない。
バギルは素早く自らの拳へ精神を集中した。
「ザードッ！離れてろよっ！」
バギルの声に、ザードは幻獣に乗ったまま、慌てて数歩分後退した。
精神の集中に伴い、バギルの拳は瞬く間に白炎に包まれた。
「うぉぉっっっ――――っっ！」
拳は灼熱の弾丸と化して魔物へと飛んだ。
魔物の鱗を難無く破り、体内へと放たれた炎熱は魔物の内臓を瞬時に焼き尽くした。
――だが。
焼け崩れるかと思われた魔物の体は、体内の何かの物質に引火したのか、激しい爆発をもたらした。
結界壁にめり込んだ腕の爆発は、綻びかけていた結界を一気に引き裂いた。
「ぅわぁぁぁっっ――――！」
歪み、引き裂かれていく結界は、周囲の空気を動揺させ、突風を巻き起こした。
幻獣から振り落とされ、ザードは地面へと叩き付けられた。
「ザードっっ！」
激しい爆煙の直撃を浴びながらも、傷一つ負っていないバギルは慌ててザードの元へと駆け寄った。
灼熱のマグマの流れを司る彼にとって、この程度の爆発など微風に等しかった。
気絶したザードを抱え起こしたところで、バギルは背筋に悪寒を感じて背後を振り向いた。

ゴレミカの施した結界の戒めを解かれ、壁のあった彼方から、何かが弾き出される気配があった。
恐らく、この結界の内側にも何重かに封印の為の壁や設備が設けられていたのだろう。
それらが、この場所の結界壁が無理に破壊された為に均衡を崩し――連鎖反応的に崩壊した。
底知れない暗黒の一塊は、禍々しい気配を垂れ流しながらも尚、夜の闇の彼方で留まっていた。

◆

気を失っていたザードの意識の中に、潜り込んで来るものがあった。
「――――か……？」
耳元で囁き掛けて来る様な、誘惑の微かな声。
力が、欲しくはないか？
不安に付け入る様な、或いは全ての欲望を見透かしているかの様な囁きだった。
――苦悩し、不安に苛まれる者にこそ、力は与えられるべきなのだ。
それは、封印の中身からの呼び掛けではなかったのかも知れない。
ザードは無意識の内に、封印の中身が何であるかを感じ取っていた様だった。
無力で脆弱な自分の能力を、それは補い高める事が出来る。
邪で大きな力を前に、ザードの内の欲望が触発されたのだろうか。
――独り成り。
ザードの欲望か、封印の中身か。暗い呼び掛けはザードの意識を刺激し続けた。
独り成り――ザードには確かに大きな力を渇望する苦

悩と不安が内在していた。
＞ｉ３７９１１―４７５０＜
神の身でありながら、幻神は塵芥の様に自然発生する低級な神だと、一部の高慢な神々や人間達に見做されていた。
独りでに生まれる「独り成り」と蔑称され、差別を受ける事もあった。
今でこそ、差別と蔑視は一部の地域に留まりつつあるのだが、それでも尚、幻神には差別やそれによる孤独の影が付きまとっていた。
――孤独。
灼熱神バギルは、ザードが幼い頃からの友達だった。
しかし、バギルは冥王ヴァンザキロルの下へと修行に去って行った。
――彼は、友と過ごす事よりも、自分の力を伸ばす事を選んだのだ。
拭い去り難い孤独への不安は心の奥底に沈潜し、ザードの心を苦しめ続けた。
結局、幻神の自分は独りで、誰からも取り残されるのだろうか？
「力を……。」
無意識の中で、ザードは夜の闇の向こうへと手を伸ばした。
ザードの呟きを逃さず、封印されていたものは掌中へと飛び込んで来た。
どんな闇よりも尚深い、遠い彼方からやって来た黒。
一瞬にして掌からザードの体内へと溶け込んだのは、半分に欠けた漆黒の神霊石だった。
それは、六百年前にゴレミカによってこの土地に封印された、あの異形の脳髄の神のものだった。

程無くして、ザードの眉間の瞳を鋭い痛みが貫いた。
痛みと同時に、頭の奥深くへと侵入してくる物の気配があり、激しい頭痛と吐き気が起こった。
「うぐっっ、――うぅっ……。」
「ザードッッ！？」
気絶したままもがき始めたザードにバギルは焦った。
すぐにザードの変調は治まったが、バギルはザードを抱き上げると、元来た道を引き返していった。
こんな事になるのなら、来るのではなかった。
後悔の念に心を傷め、バギルは矢の様に山道を疾駆した。
破壊された結界も、その中身がどうなったかも、バギルの頭からは抜け落ちてしまっていた。

◆

ゴレミカが同じ場所を訪れたのは、バギル達が立ち去ってから数刻の後だった。
破壊された結界より何より、封印されていた神霊石が失われていた事に女神は驚愕した。
「ああ……、もっと早くに来ていれば……。」
結界の境目に出来た爆発の窪みと、飛散する魔物の焼け焦げた肉片。
ここで何が起こったのか、ゴレミカは過去透視の宝珠を放って情報を得た。
「ヒウ・ザード……。あの神が。」
数刻後の未来にありながら、ゴレミカはこの場で起きた事の、無意識の領域までをも知り得たのだった。
もっと早くに来ていれば。
ゴレミカはもう一度深く悔やんだ。
六百年の時間を経て、結界を支えるエネルギーは消耗していた。再び結界を設ける準備の為に、ゴレミカはこ

の土地に滞在して体力と精神力を蓄えていたのだった。
驚愕と後悔に乱れる心をなだめながら、ゴレミカは結界のあった場所を越えて、封印の中心部へと進んでいった。
この場所には、まだ結界を構成していたエネルギーの残滓がくすぶり、あちこちに小さな稲光が噴き上がっていた。
封印の中心部も確かめておかなければならない。いずれにせよ、この場を放置したまま立ち去る事は出来なかった。
まあ、いい。神霊石を持ち去った者は分かったのだから。
ゴレミカはそれだけを慰めに足を進めた。

第3章「復活」

寝苦しさにザードは目を覚ました。
夜の闇の中に一瞬、失見当識に陥ったが、布団の感触と時計の文字盤の発光に、宿の部屋に居るという事を何とか理解した。
まだ半ばはぼんやりとする頭で体を起こし、ザードは室内を見回した。
隣のベッドではバギルが半身を起こしたまま、壁にもたれる様にして眠っていた。
そうだ。自分はあの山の中で気絶して・・・。
気絶していたにも関わらず、漆黒の神霊石を掴み取る感触と、頭痛と吐き気の事はザードの記憶に刻み込まれていた。
ザードは無意識の内に眉間の瞳へと手を遣った。
痛みを伴う小さな疼きが、まだ残っていた。
ザードの内へと飛来したものは、確実にザードの体内に宿っていたのだった。
「んー……。」
寝言だろうか。何事かを呟きながらバギルが体を動かした。
バギルの事だから、寝ずに看病するつもりが途中で寝入ってしまったのだろう。
「！」
感謝の念に混じって、別の感情が湧き上がっている事に気付き、ザードははっとした。
――独り成り。
何故、自分はバギルと共にここに居るのだろう？
友達だから――いや、そうではない。

……自分が幻神だからだ。誰か有力な神にすがっていないと生き辛いから。差別と蔑視に晒されて生きていくのは難しいから。

自分は一体何を考えているのだろう？

次々と湧き起こる暗い思いを掻き消そうとするが、それは徒労に終わった。

――幻神。

幻神であるザードには何の力も無いし、誰も親しくなどしない。

――自分に力があれば、他の神に媚びへつらったりなどしないのに。

バギルと付き合っている中で、心の奥底にザードも気付かない内に芽生えていたものがあった。

幻神である事への劣等感や、他の神々への憎しみや怒り。

それらは今、ザード自身の抑制を離れ、大きく膨れ上がろうとしていた。

ザードの心の変化など知る由も無く、バギルは穏やかな寝息を立てて眠っていた。

ザードは冷たい憎しみの炎が、胸の内を焦がし始めている事に気付いた。

自分が自分でないものへと塗り替えられていく・・・

得体の知れない不安と怯えも、いつしか再びまどろみの中に引き込まれていく内に、消え去っていった。

◆

翌朝。バギルとザードは宿を後にした。

「神殿には戻らなくてもいいの？」

晴れ渡った青空に映えるバギルの神殿を指差し、ザードは尋ねた。

「別にいいや、面倒臭ぇ。――いつもの事だし、ウチの

連中も気にしねぇよ。」
バギルは屈託の無い笑みを浮かべて答え、それからザードの顔を覗き込んだ。
「――それより、もう体の具合は大丈夫なのか？」
バギルの問い掛けに、ザードは微笑みを返した。
「うんー。何とか大丈夫。」
「そっか……。」
バギルはザードの微笑に安心した様に息をついた。
だが、微笑みながらもザードは、時折疼く眉間の痛みに不安を感じ続けていた。
「じゃあ、行こうぜ。」
バギルに手を引かれ、ザードは歩き始めた。
二人が向かう場所は神国神殿だった。

◆

ダイナ山脈のあるメル・ロー大陸から神国へ行くには船が唯一の交通手段だった。
飛行機や瞬間移動――テレポーテーションなど、もっと便利な方法も無い訳ではなかったが、さほど一般的な手段ではなかった。
ダイナ山脈南端から古びた列車で2時間程。
バギルとザードは神国行きの船の出ている小さな港町へと到着した。
「――幻神よ……。」
「まあっ！……本当、嫌だわ！」
駅から港へと向かう途中、人間達の嫌悪に満ちた囁きがザードの耳に入って来た。
行き交う神々や人間達の無遠慮に注がれる視線に、ザードはバギルの後ろに隠れる様にして歩き続けた。
額の第3の目は、ザードが幻神であるという事を一目で分からせていた。

縦に長く裂け、淡く濁った白い膜が掛かった瞳。
瞳といっても幻神の場合は視覚には関係が無い。幻神の能力を調節する為の器官だった。
この世界全ての神々の集い来る神々の中心地、神国神殿では流石に露骨な差別や蔑視は無かった。
だが、この港町の様な地方や辺境では、根強く差別や偏見が残っていたのだった。
――独り成り。
他者からこう蔑まれると同時に、ザードもまた同じ言葉を呟き、悲しみに唇を噛み続けて来たのだった。
――だが、しかし。
憎しみ、屈辱、怒り――今迄抱いた事の無い異質な感情が、ザードの中に膨らみ始めていた。

◆

出航まで暫く時間があり、二人は港の喫茶店で食事を取る事にした。
「――これとこれを。」
バギルの注文を聞き終わるとすぐに、人間のウェイトレスは強張った表情で足早にカウンターの中に引っ込んでしまった。
決してバギルが高名なダイナ山脈の灼熱神だという事で、人間が緊張していると言う訳ではなかった。
ザードは店に入ってからも終始無言のまま、窓の外の景色を眺めていた。
今まで、何度となく繰り返されて来た他の神々や人間達の反応に、ザードは今更、何の思いも抱いてはいなかった。
バギルもまた、無言のまま同じ様に外を眺めた。
港には幾つかの大きな客船が停泊し、船員達が慌ただしく出航の準備をしていた。

バギルには、ザードの痛みも悲しみも分かってやる事は出来なかった。お互いの幼い頃から共に過ごして来た身であっても、疎外され、嫌悪される辛さは本当には分かってやれない。

――ただ、黙って側に居る。

それだけが、バギルに出来る唯一の事だった。そしてザードも、それによって慰められていた。

自分は独りではないのだと。

他の誰もが自分を疎んじたとしても、バギルだけは決してその者達とは違うのだと・・・。

――また、額の瞳に痛みが走った。

慰められ、穏やかさを取り戻しかけたザードの心を、その痛みは再び掻き乱そうとした。

バギルは自分を置き去りにして冥王の下へと行ってしまったのではなかったか？

ザードが思っている程、バギルはザードの事を大切には思っていないのではないか？

ザードの心に昨夜の様に冷たい炎が揺らめき始めた。

「――幻神がこんな所をうろつかないでぇぇっっ！」

ヒステリックな女の金切り声に二人ははっと顔を上げた。

じゃきっ――と、はさみが布を裂く音が女の声に続いた。

ザードとバギルは一瞬、呆気に取られて何が起こったのか理解しかねた。

バギルはザードの黒い肩掛けへと目を移し・・素早く立ち上がると、逃げ去ろうとしていた人間の女の腕を捻じり上げた。

顔を見ると、やや年がいった様な人間の中年の婦人だった。

「放してちょうだいっ！乱暴しないでっ！」
婦人は大き目の布切り鋏を振り回して喚き立てた。
「乱暴はあんただろうがっ！」
バギルと女性のやり取りを呆然と見ながら、ザードは自分の肩掛けへと目を落とし・・ようやく、切り裂かれている事に気が付いた。
行き過ぎた差別感情による嫌がらせ。
幻神に限らず、何らかの差別を受けている者達に対しては時折起こる事だった。
ザードはぼんやりと、切り裂かれた肩掛けへと手を当てた。
「ダイナ山脈の主神ともあろう方が、何故こんな幻神なんかと一緒におられるのですかっ！？」
婦人は尚も、バギルに腕を掴まれたまま叫び続けた。
店内の人間達も、むしろ婦人の方に同情的な視線を送っていた様だった。
「幻神はかつて、この土地一帯を荒らし回ったのですよっ！」
「いい加減にしろっ！」
バギルの怒鳴り声にも、婦人は怯む様子は無かった。
彼女の主張はごく一部、真実が含まれていた。
二、三百年前に、ダイナ山脈南部地方の町や村を破壊し、略奪を繰り返した盗賊団が存在していた。その集団の主立った者の中に幻神が多くいたのだった。
それが古くからあるこの地方の神々や人間の、幻神への差別感情と結び付き、一層根深い嫌悪と侮蔑の感情へと変化していったのだろう。
「バギル……もう、いいよぉ。」
いつもの事。こんな人間達の差別は。
ザードは諦め切った表情で穏やかに口を開いた。

「――――――――！！」
その瞬間。
ザードの頭の奥深くが、激しい痛みに貫かれた。
――何故、自分がこんなに卑屈にならなければならないのだ？
――何故、こんな連中に自分が……。
ザードの心の奥底に沈潜し続けていた、怒りや恨み、憎しみ――それらが堰を切った様にザードの心の表面へと溢れ出して来た。
＞ｉ３７９１４―４７５０＜
自分の心が、自分の内側から激しく突き上げて来る衝動によって塗り替えられていくのをザードは感じた。
息を吸って――、吐く。
その僅かの――だが、ザードにとっては長い時間、心の中でそんな変化を拒む自分と望む自分がせめぎ合い――――そして。
「人間如きが……っ、身の程知らずめ。」
細い目が、冷酷な色を宿して一層細められた。
突然ザードの口から漏れた言葉に、バギルは耳を疑った。
この穏やかな幼馴染みの何処から、この様な言葉が発せられたのだろうか。
「このボクを……、よくも侮辱してくれたね……。」
傲然と婦人とバギルを睨め付け、ザードは婦人を容赦無く突き飛ばした。
悲鳴を上げる間も無く、彼女は隣の席へ頭から突っ込んでいった。
テーブルや椅子が倒れ、備え付けの小瓶の砂糖や食塩が、彼女の頭や体に降り注いだ。
「お、おいおい、ザード……。」

今度はバギルが呆然と立ち尽くしていた。
一体自分の目の前で何が起こっているのか、俄には理解しかねていた。
バギルが伸ばした手をザードは冷淡な声で拒絶した。
「汚い手でボクに触るのはやめてよ。」
バギルの手は凍り付いた。
自分の目の前にいるのは、まるで見知らぬ別人の様な――冷淡で傲慢な幻神だった。
何故。一体何が原因で、瞬時の内にこの幼馴染みはこの様な変貌を遂げてしまったのか。
混乱に立ち尽くすバギルをよそに、ザードは倒れたままの婦人の前にやって来た。
眉間の瞳が妖しい輝きを宿した。
ザードの精神集中と共に、無数のツタの様な触手に覆われた球状の幻獣が召喚された。
幻獣は主の思念に従い、粘液に覆われた触手を婦人へと叩きつけた。
「いっ、嫌あああっっっ！」
一層甲高い金切り声が店内にこだました。
幻獣の力はそれ程でもなく、むしろ不気味な触手の質感と感触に婦人は嫌悪の悲鳴を上げていた。
「ザード！一体どうしたってんだっ。馬鹿な事はやめろよっ！」
幼馴染みの変化に戸惑いながらも、バギルは婦人へと振り上げられた幻獣の触手を掴み取った。
「うるさいよ、オマエ。」
ぼそっとザードは呟き、疎ましげな目をバギルへと向けた。
自分の暴言を省みる心は、既にザードの奥底へと消え去っていた。

ザードの思念を受け、幻獣は触手を掴み続けているバギルを店の壁へと叩き付けた。
婦人に対しての力とは比べ物にならないのは、ザードのバギルに対する漠然とした憎しみが今、顕在化したからなのだろうか。
激しい力で叩き付けられた痛みに目を見開いたバギルの表情を見て、ザードは自分の中に暗く激しい感情が高揚して来るのを感じた。
だがそれは、優しさや穏やかさ・・今までのザードの心の全てが、決定的に封じ込められる事でもあった。
――もう、こんな奴なんかに付き合わなくてもいいのだ。
悲しい思いもしなくていい。
幻神だという劣等感を感じなくてもいい。
もう、こんな奴の哀れみなんかにすがらなくても、自分は生きていけるのだ。
ザードの唇が、不気味な笑みの形に歪んだ。
叩き付けられた壁から滑り落ち、呆然と壁際に座り続けるバギルをザードは見下ろした。
「ボクは、自由になったんだ！・・キミなんかより、ずっと強い力を得て！」
何かに取り憑かれている。
ザードの勝ち誇った様な宣言を聞きながら、バギルはぼんやりと思った。
何もかも信じたくない出来事ばかりだった。
バギルはただ、呆然とザードを見上げているだけだった。
「もう、キミなんか要らないよ……。冥王の所でも何処でも、行ってしまえばいいよ！」
バギルを覗き込むザードの表情の、何と冷酷な事か。

「な、なぁ……。おいっ、ザード。お前、何を言ってんだ？俺、分かんねぇよ……。」
これが、あの穏やかで優しいザードと同じ神なのだろうか。
「バカなキミには分からなくていいよ。」
バギルの呼び掛けは、ザードの嘲笑に掻き消された。
ザードはずっと不安だった。
幼馴染みとは言うものの、バギルは自分の下を遠く離れてしまった。
自分とバギルとの繋がりも、随分と薄れてしまった様な気がしていた。
もう、自分はバギルにとって必要無い存在なのだろうか。
――だが。
そんな不安も全て、ザードの内に宿った漆黒の神霊石の力の前に塗りつぶされていった。
――必要無いのは、自分ではない。
他の奴らの方なのだ。
自分の気持ちを不安にさせ、動揺させるバギルや他の者達の方こそが、不必要なのだ。
「――じゃあね。」
ザードは唇の端を歪め、嘲笑う様に言うと、店を飛び出して行った。
「ザードっ！おいっっ！」
初めてバギルは我に返った。
咄嗟に立ち上がり、ザードの腕へと手を伸ばした。
――が、その手は空しく宙を掴むのみだった。
店の扉をくぐり抜け、ザードは何処へともなく立ち去っていった。

◆

「サード……。一体、どうしちまったんだよ……。」
ザードの後を追ってバギルは店の扉を開けたが、既に彼の姿は何処にも無かった。
一体、何がどうなっているのか。
答えなど出る訳も無く、バギルは未だに混乱を続ける頭のまま、扉の前で佇んでいた。
「……また……遅かったのね……。」
突然、バギルの背後で息切れに喘ぐ声がした。
緩やかに波打つ豊かな髪は幾分ほつれ、乱れていた。
余程急いでこの場にやって来たのか、細い肩は大きく上下し、息切れはすぐには治まりそうもなかった。
ゴレミカはあれから・・封印の場所に着いてから、その場の後始末に今朝までかかってしまったのだった。
それからザード達の後を辿り、何とか港までやって来た――が、ここでもまた、入れ違いになってしまったのだった。
ゴレミカには落胆に沈むゆとりは無かった。
「――ゴレミカ……？」
何故ゴレミカがここにやって来たのか、訝しむバギルに構わず、ゴレミカは瞬間移動の宝珠を懐から取り出した。
「ゴレミカッ！」
無視された形となったバギルの激情が一気に弾けた。
あろう事か、発動を始め掛けていた宝珠をゴレミカの手から奪い取り、彼女の背に掴みかかったのだった。
一介の灼熱神風情が、最も古く貴い女神に手を掛けるなど――彼女の信者が目にすれば卒倒するに違いない。
「なあっっ！一体全体、何なんだよこれはっっ！！何でザードがおかしくなっちまったんだよぉっ！？」
自らの肩を掴んで激しく揺すり続けるバギルの手を取

り、ゴレミカは諭す様に穏やかな声で話し掛けた。
「あなたの幼馴染みは、邪悪な神の神霊石のかけらを取り込んでしまったのです。」
女神の静かな声と、一応の疑問への解説に、バギルの心は落ち着きを取り戻した。
「――あなたも、私と共に来ますか？」
ゴレミカの問い掛けに、混乱や怒りによる激情ではない、熱い思いがバギルの中に漲り始めた。
「おおっ！当然だっ！」
ザードへ必ず追い付き、必ず元の優しい幼馴染みに戻してみせる。
ゴレミカはバギルから宝珠を返してもらうと、宙空へと浮かべた。
ゴレミカの思念に反応し、宝珠は青く澄んだ輝きを放ち始めた。
瞬間移動に入る直前、ゴレミカはザードから放たれている神霊石の邪気を探った。
ザードもまた瞬間移動を繰り返し、凄まじい速度で海を越え、島々を跳躍していた。
ザード自身の意志ではない。恐らくは神霊石に操られる様にして、ザードは一つの方向を目指していた。
――神国神殿。
進行方向の果てにある都市や集落、様々な神々の神殿や聖地などを考え合わせ、ゴレミカはザードの目的地を直感した。
宝珠は一際鮮やかな輝きを放ち、ゴレミカとバギルの姿をその光の中に包み込んだ。

◆

ザードは、自らの与り知らぬ所から突き上がって来る衝動によって飛び続けていた。

神国神殿へ。
そこに行けば、体内へと宿った力は完全になる。
果てしない大海原を生身で疾駆し、次の瞬間には名も知らぬ小島の地面を蹴り付けて跳躍した。
初めて味わう瞬間移動の感覚に、ザードの意識は高揚していた。
体内の神霊石が、目的地が近付いている事を告げた。
神国神殿・・・。
そこに、砕かれた神霊石の残り半分が存在している。
そこに行けば、自分はより強く、完璧になれる。
ザードは恍惚と飛び続けた。

第４章「幻惑」

天地に幾多の神々が宿り、あまたの命と共に日々を営む世界――神国。
神国とは、この地上の世界を意味する言葉であり、また一般的には、地上の神々の多くが住まう神州大陸を指しているものだった。
世界の神々の集う中枢であり、平和と安定の象徴であり――全ての神々と人間が、安らぎと輝かしいものを胸に抱いてその国の名を口にした。
神国――およそ全ての神々が集い、全ての命あるものが共に生きる事を許し合う郷。

◆

神州大陸の南西部、神山半島の先端に神国神殿はあった。
空から見下ろす者は、誰もが驚嘆をもってその場所を指差すに違いない。
きらめく海の流れに洗われる深緑の半島から、天空へと真っ直ぐに聳える白亜の神殿――――神国神殿。
神国神殿を初めて訪れた者は、その白亜の巨城の威容を、驚愕や嘆息と共に見上げるのだった。
神殿という慎ましやかな言葉の響きとは縁遠い、地上数十階の圧倒的な質量と迫力が、訪れた者達に衝撃を与えるのだった。
そしてまた、神国神殿とは、正確にはこの巨大な神殿だけではなかった。
その周辺の神山半島先端部一帯の、神々の聖地を全て含む「神域」とでも言うべき土地全てを指し示すものだった。

神々の住居である白亜の巨城・・正確には神国神殿本殿、或いは本部とも呼ばれる・・の周囲には、大小、新旧の様々な神殿や建物が建ち並んでいた。
いわば「神域」は、一つの小さな町程の規模を誇っていたのだった。

◆

神国神殿本殿から少し離れた所には、やや古い時代の神々の神殿が幾つか建っていた。
白い大理石の柱は風雨に黒ずみ、内部へと続く階段や壁に施された彫刻も、判別し難い程に磨耗していた。
これらの神殿は今の神々に使われる事も無いまま、荒れ果てるに任せていた。
その中の古びた神殿の一つ――その内部には、一柱の異形の神が巣食っていた。
外見はただの荒れて崩れかけた神殿だったが、内部へと入って行くと、無数の肉色のパイプや神経配線が大理石の壁に食い込んで――白亜の石材を、毒々しい金属的な光沢を放つ皮膚の様なものへと変貌させていた。
かつては、この神殿に住んでいた神が参拝に来た信者達を招き入れたと思われる大広間には、無数の内臓を連想させる肉の管が横たわっていた。
壁際には、そうした臓器の様な管が寄り集まり、様々な機械部品や神経配線と奇怪な融合を果たし――ヒトらしい形を成していた。
訪れる者の無い広間を見下ろす無表情の白い仮面。
その頭部や胸部に浮き出た眼球が、時折電子音を立てて点滅していた。
この神の名は――レウ・ファー。
神国神殿のコンピュータに宿った機械神だった。
『レウ・ファー。こちらに去年の帳簿を送って頂戴。管

理番号は――――。』
仮面の前の宙空に、ボブカットの若い女神の立体映像が出現した。
神国経理部の、経理神サナリアだった。
「了解。」
レウ・ファーは頷き、目当ての資料は即座にサナリアの所へと転送された。
＞i３７９１５―４７５０＜
経理部を初め、神国に存在する様々な組織や機関からコンピュータネットワークを通じて、レウ・ファーへと接触が行われていた。
様々な資料の管理や計算、大容量の情報処理。
多くの仕事をレウ・ファーは瞬時にこなしていった。
そもそもこの神は六百年前に、突然神国神殿のコンピュータに出現し、それらと融合を果たした神だった。
当時はその出現に警戒や混乱があったが、今では優秀な機械神として、神国の神々の厚い信頼を受けていた。
どの様な神であっても、その郷では共存する権利を持つ――姿も、所属も、能力も、信条も。何者もその権利を妨げる事は出来ない。
これが「神国」の神々の従うべき理法だった。
故に、神国には様々な神々が集っていた。
レウ・ファーもまた、この理法により神国へと受け入れられていたのだった。
レウ・ファーとの融合により、神国のコンピュータ類はその性能を桁外れに進化させた。
より大容量に、より精密に、より扱い易く・・・。
その功績と日常の仕事ぶりから、時に神々は「大神」レウ・ファーと称賛した。

◆

レウ・ファーの座す広間の扉が音も無く開いた。
機械のランプが無数に点滅し続ける薄闇の中に、一条の光が差し込んだ。
「誰かね？」
レウ・ファーは穏やかに問い掛け、白い仮面を広間に入ってくる神影に向けた。
来訪者の容貌がレウ・ファーの目に捉えられると、瞬時に神物検索は終了した。
――ヒウ・ザード。幻神。二一五歳。住所、神国神殿本殿二三階・・。
レウ・ファーの手元にあった記録は、戸籍や健康診断書位で、生身での接触による記録は全く無かった。
――つまりは、ザードと友達付き合いなどはしていないという事だった。
「何の用かね？」
レウ・ファーの問い掛けにも、ザードはただ微笑を浮かべるのみだった。
無言のままレウ・ファーへと近寄り、何かに取り憑かれたかの様な、妖しい瞳の輝きが機械神の仮面を射た。
ザードの意思ではない――自らの内に宿る何か別のものが、ザードから言葉を発した。
「ボクは――キミだよ……。」
ザードから放たれる邪気に、レウ・ファーの頭脳は激しい衝撃を感じた。
目の前の幻神から感じられる気配は、余りにも自らのものと酷似していた。
驚愕に震えるレウ・ファーへ、ザードは更に歩み寄った。
「ボクは――キミの神霊力そのもの……。」
ザードの胸元へ、半分に掛けた漆黒の神霊石が浮かび

上がった。
「そっ！それはっっ！」
レウ・ファーの驚愕の声は、次の瞬間、激しい歓喜に変わった。
肉の管によって形成された腕を突き出し、レウ・ファーは神霊石を掴み取ろうとした。
だが――
「駄目だよっ！・・渡すもんか！これは……これはボクのものなんだっ！」
ザードもまた掌を突き出し・・不可視の障壁がレウ・ファーの巨大な手を弾いた。
もう片方の手で胸元の神霊石を握り締め、ザードは歯を剥いて笑った。
「誰が、誰が渡すもんかっっ！」
鬼気迫る表情でザードはレウ・ファーを睨みながら、神霊石を自らの胸の中へと捻じ込んでいった。
ザードの執念が、神霊石の支配を脱して――それを自らのものとして取り込んだ様だった。
神霊石は再びザードの胸中へと没し、その体内へと溶け込んだ。
――過剰な神霊力の蓄積による、人格の変容。
レウ・ファーは、正気すらも疑わしく立ち尽くすザードを見下ろしながら冷静に分析した。
しかし。
分析結果を受け取ったレウ・ファー自身は、次第に高まり来る興奮と喜びに打ち震え始めた。
それに同調し、広間中の肉のパイプや機械類が蠢き始めた。
宙空には様々な表示の立体映像が飛び交い、レウ・ファーの眼前に一つの文章が出現した。

――『神国コンピュータネットワーク全回線遮断。』
その瞬間、レウ・ファーに回線を接続していた神国の全てのコンピュータが一斉に緊急事態を表示した。
レウ・ファーの眼前の表示が次のものに移った。
――『全ネットワークに強制侵入。』
レウ・ファーは、仮面を上へと向けた。
赤や黄、青・・ランプの点滅する様々な色の光を受けて、白磁の仮面は極彩色に染まっていた。
声だけが、興奮と歓喜に震えながら広間に響いた。
「私は――待っていた！この瞬間をっっ！」
六百年前、ゴレミカの封印を逃れたレウ・ファーは、神国神殿へと流れ着いたのだった。
生まれて間も無いレウ・ファーは、神国のコンピュータと同化し、そこから膨大な知識と技術を得た。
脆弱な脳髄の本体を守る為に、自らの力で変質させた肉の管を鎧として身に着け――機会を伺い続けていた。
自らの邪悪な本性を露にし、この世界全てを手にする機会を――。
ゴレミカにより封じられていた、残りの神霊石が再び手元へと帰って来た。
＞ｉ３７９１６―４７５０＜
今や、「大神」とまで讃えられる身になったレウ・ファーが元の神霊力を手にすれば、他神の追随を許す事は無い。
「この幻神から後でゆっくり我が力を取り出すもよし、このまま利用するもよし……。」
未だ正気の程は定かではないザードを見下ろしレウ・ファーは、幻神についての情報をコンピュータで参照した。
差別と蔑視を受け続けた歴史や優れた能力は、レウ・

ファーの邪悪な興味を誘った。
「今こそっ！今こそ、私は望みを叶える！！」

◆

神国経理部は、神国神殿本殿からそう離れていない場所にあった。
郵政省や情報局を初め、幾つかの機関は神国神殿内に存在していたのだった。
白を基調とした石材の簡素な建物は、神域の落ち着いた佇まいを損なってはいなかった。
何かの神の神殿と言われれば納得してしまいそうな雰囲気がないでもない。
「一体どうなってるって言うの？」
サナリアは呆然と自分の机に備え付けられたコンピュータの画面を見つめた。
硬質の光沢を帯びた画面は、呆気に取られたサナリアの顔を映すのみだった。
経理部の職員が混乱に喚き、部屋は騒然としていた。
突然――余りにも突然、コンピュータはその機能を停止した。
「レウ・ファーです！大神が暴走している様です！」
年配の職員が、皺だらけの顔を上げて叫んだ。
彼の机のコンピュータは、経理部の中央コンピュータに辛うじて接続出来ていた。
だが、経理部の中央コンピュータは、サナリア達の制御下にはなかった。
「故障？まさか。」
サナリアは困惑した。
レウ・ファーはたしかに機械の体を持ってはいるが、その本質は神だった。通常の機械が起こす故障などとは無縁の筈だった。

「――レウ・ファーの神殿へ行ってみるわ！」
言うなり、サナリアは袖カバーを外すのももどかしく部屋を走り出た。
コンピュータの機能停止による被害、損失額。そして諸々の復興費用――――――。
鬼の経理神とも、鉄血の経理部長とも、神々に恐れ称されるサナリアの頭脳の内で、凄まじい速度でそれらの予算の計算が始まっていた。
急がないと――神国の国庫は――大変な事になる。

◆

レウ・ファーは、神国――神州大陸全土の全てのコンピュータに強制侵入を行い、それらの持つ全ての情報を自身の中へ吸い上げていた。
短時間の内に、世界の始まりから、現在に至るまでの天文学的な量の情報がレウ・ファーの本体へと蓄積されていった。
やがて、レウ・ファーの侵入は神域の中心「奥の院」へと及んでいった。
神域の奥深く、小道すら、生い茂る古木と下草に呑み込まれた場所に「奥の院」はあった。
鬱蒼と生い茂る巨木に覆われた半球状の建物は、まさに神業によって、微細な継ぎ目すら分からない程の石材の組み合わせで出来ていた。
「奥の院」とは神々の内の長老や、様々な分野での実力者によって構成される組織だった。
実際に何かを決定したり強制したりする権限は無かったが、神国成立以来の長い伝統と格式を誇り、神国の機関や組織に様々な助言や監督を行っていた。
――その地下深く。
薄暗いとも、薄明るいとも取れる照明が、茫漠と広が

る地下ドームの内部を満たしていた。
天井と床の上には、それぞれ同じ巨大な紋章が刻印されていた。
瞳を中心に広がる六枚の花弁。不可思議な文字を思わせる刻印が花弁には施されていたが、誰もそれを読む事は出来なかった。
そこでは重力の束縛は無いのか・・或いは神々の空中浮揚によるものか、天地左右様々な方向に頭を向けて漂う神々の姿があった。
「レウ・ファーが侵入を開始した様じゃのう。」
足下まで伸びた白い髭を撫でながら、その中の一神が嗄れた声を発した。
＞ｉ３７９１７―４７５０＜
「ゴレミカのせいで多少遅れたが。」
「何とか思惑通りレウ・ファーが動き始めたわ。」
白髯の神の横を、球状の体に二つの顔を持つ神が回転しながら通り過ぎた。
「あれなる機械神。我々の目的の為には必要な者。」
「おや、奴め、「奥の院」の機密にまで侵入を始めたぞな。」
宙を漂う神々は、成り行きを面白がる様に口々に言い立てた。
「――侵入防止のプログラムを全て解除しろ。」
ドームの一番下層に佇んでいる、青いマントにくるまれた神が重々しく口を開いた。
その神の声が響くやいなや、ドームの中は即座に静まり返った。
畏れ、敬い――怯えすら滲む他の神々の視線を一身に浴びながら、青い神影は言葉を続けた。
「ヌマンティアの情報を除く、全ての機密をくれてやる

がいい。」
神々はその言葉に従った。
宙を漂う内の誰かが片手を挙げ・・それだけで「奥の院」のコンピュータに指令が送られた。
青い神は足下の床に広がる紋章に目を落とした。
「機械神レウ・ファー――いや。虚空の闇から、ヌマンティアの業により生まれし脳髄の神よ。」
嘲笑の呟きが、目深に顔に被さる青いフードの中に吸い込まれた。
「せいぜい、全知全能を気取るがいい。」

◆

サナリアは飛び込む様な勢いでレウ・ファーの座す広間の扉を開けた。
目まぐるしく点滅し、次々に入れ代わり飛び交う立体映像の表示の数々。
『データ入手完了』『強制侵入先――』
それらの表示は、この事態が暴走ではなくレウ・ファーの意図の下に起こされた事をサナリアに語っていた。
白磁の仮面の大神の足下に立つ、幻神の青年が自分を振り返るのをサナリアは見た。
「あなた、一体ここで何をやっているの？――レウ・ファー！今すぐ通常業務に戻りなさいっ！一体これはどう言う事なのっ！？この状態での一分がどれ程の被害を出すか分かってるでしょうね！」
異常事態と見知らぬ幻神の侵入者に取り乱す事無く、サナリアは鬼の経理神に相応しい冷厳な口調で詰め寄った。
『強制侵入先』の表示が、短時間の内に凄まじい速度で増加しているのがサナリアの目に留まった。
神国図書館、経理部、経済庁、郵政省、護法庁、その

他各種機関――――そして、「奥の院」……。
神国に存在する様々な機関がレウ・ファーの侵入を受けていた。侵入した先々で経理部の様な混乱が起きている事は想像に難くなかった。
サナリアは再びレウ・ファーへと呼び掛けた。
「今すぐ通常業務に戻りなさい！！」
サナリアの命令は、無表情な仮面の一瞥の下に拒絶された。
「――断る。私は誰の命令も受けはしない。」
レウ・ファーの答えに、サナリアは決然とタイトスカートのポケットから携帯通信機を取り出した。
ボタン一つでそれは神国神殿保安部へと繋がった。
「コンピュータの暴走はレウ・ファーの発狂が原因！直ちに出動して頂戴！」
自分だけでレウ・ファーの神殿に来たのは失敗だったかも知れない。
レウ・ファーとザードのただならぬ様子に、サナリアは得体の知れない危機感を直感した。
「――発狂、ね……。」
次第に周囲の出来事への認識力が戻って来たのか、ザードは細い目を嘲笑に一層細くした。
「いや！覚醒だ！！」
ザードの言葉に、レウ・ファーが続いた。
「私は己の真実の姿を取り戻し、自分の真の願いを叶える！！」
レウ・ファーは、高らかに邪悪な宣言をした。
言葉が終わるとすぐに、広間に横たわっている肉の管の一部が急速にうねり始めた。
レウ・ファーの前にそれらは寄り集まり、絡まり合い――ヒトの体らしいものを形作っていった。

「何を……。」
サナリアは思わず後ずさった。
保安部の職員はまだ到着していなかった。だが彼らが来たところでどれ程のものか……。
サナリアは不安と緊張に汗ばむ額を拭った。
――そこへ。
サナリアが開けたままにしていた扉から叫ぶ者があった。
「ザードぉっっ！」
声にすら灼熱の紅気の滲む、激しい呼び声。
その声に打たれたかの様に、ザードは一瞬体を震わせ――忌々し気に歯噛みした。
「バギル……。」
ザードは広間へと入って来るバギルの背後に、ゴレミカの後ろ姿を認めた。
「ゴレミカの力で、ボクの居場所を嗅ぎつけたという訳か。」
「ザード、俺と一緒に帰ろう！なあ、お前は操られてるんだ！」
バギルの呼びかけをうっとおしそうにザードは聞き流した。
「ボクは自分の意志で、ここへ来たんだ。誰にも操られてなんかいない……。」
二神のそんなやり取りの内にも、絡み合う管は五つのヒトらしい塊と化し、頭部にはレウ・ファーと同じ白い仮面が浮き出て来た。
首に当たる部分から濃密な黒いガスが噴き出し・・粘土細工をこね回す様な奇妙な揺らめきを見せた。
瞬く間にガスはシルクハットとマントを形成した。
この黒衣の人形はレウ・デアと呼ばれる、レウ・ファ

ーの分身だった。
レウ・デアの一体は黒いマントを翻し、レウ・ファーの肩へと跳躍した。
完全な布の質感を持って黒い羽の様に空中に広がるマントの下から、濡れた光沢を帯びた触手や肉の管が覗いた。
「この体も用済みか……。」
レウ・ファーは己の仮面に手を掛け、ゆっくりと引き剥がした。
仮面の裏側に繋がっていた神経繊維の束が、次々に音を立ててちぎれていった。
ちぎれて粘りけのある体液を噴き出す繊維の奥に、無数の触手に覆われた眼球が覗いた。
六百年の間、広間を睥睨してきた白磁の仮面は、今や滴り落ちる己の粘液にまみれて汚れ、掌中で次第にひび割れていった。
「あれはっ！」
サナリアやバギルの後ろで、暫く成り行きを見守っていたゴレミカが悲鳴の様な声を上げた。
金属質の肉の管や、機械部品と融合した肉片がレウ・ファーの仮面のあった部分から押し出されていき・・僅かの間、不格好に膨れ上がった肉塊と化して宙に留まった後、広間の床の上に落ちていった。
肉塊の落ちた後から、無数の触手に覆われた球状の脳が這い出して来た。
ゴレミカは、愕然とその脳髄の神の蠢く様子を見上げた。
あれは――まさしく、六百年前にダイナ山脈で封印し損ねた邪神。
あの神が、神国神殿にやって来ていたとは。

――優秀な機械神として、神国の神々の信頼を集めていたとは。
驚愕の事実よりも、六百年もの間気付きもしなかった自分の間抜けさに、ゴレミカは呆然とした。
「レウ・ファー！」
澄んだ声がレウ・ファーへ向けられた。
ゴレミカは懐から宝珠を取り出して身構えた。
たおやかな女神に不似合いな気迫が俄に立ち上った。
ゴレミカの様子に、バギルは充分事情が呑み込めないなりに、
「レウ・ファーッッ！てめぇがザードをこんなにしやがったのかぁぁっっ！」
ザードの邪悪な変貌への困惑を、怒りに変えたバギルの気迫が拳の熱気と化した。
「え？えっ？どうなってるのっ？」
事態が呑み込めずにレウ・ファーとバギル達を交互に見比べているだけのサナリアの左右を、二つの光球がよぎった。
ゴレミカの宝珠と、バギルの放った炎だった。
剥き出しになった無防備な本体を庇い、レウ・デアがマントを広げて光球の前に立ち塞がった。
「ふふっ。」
そこへ薄笑いと共に、更にザードがレウ・デアの前の空中に浮かび上がった。
「！」
小石を受け止めるかの様に、軽い調子で繰り出された掌の先に不可視の障壁が広がった。
宝珠と炎はザードの手に触れる直前で弾き返された。
微かな光の破片を飛散させながら宝珠は砕け散り、炎もまた広間のあらぬ方向を焼き焦がして消滅した。

繰り出された掌がゆっくりと下げられ・・傲然と浮揚するザードの表情がバギルの目に入った。
「やるな。」
ザードに礼も言わず、レウ・ファーの本体はレウ・デアのマントの懐へと潜り込んでいった。
そこへやっと、保安部の職員が到着した。
屈強な体と優れた格闘術を誇る、戦神や武神に名を連ねる神々だった。
「レウ・デアとザードを……。」
サナリアが言い終わらない内に状況を判断した戦神達は、敏捷な動きでザードとレウ・デアに飛び掛かって行った。
「ふん。」
蠅を追い払う・・ザードのそんな手の動きは、しかし無数の刃を含んだ突風を巻き起こした。
防御壁を張り、肉体を硬化させ、或いは手刀で叩き落とす・・戦神達にとっては造作も無い事と思われたが。
「ザードぉっ！やめろっっ！」
バギルの叫び声が突風の中に掻き消された。
ザードの放った突風と刃の威力は、戦神達の予想を凌駕し、彼らの体を容赦無く切り裂いた。
神殿の壁や床、それらに食い込むレウ・ファーの肉の管が薄布を裂く様に切り刻まれた事に比べ、鍛え抜かれた戦神達の体は血まみれの裂傷を負うに留まった。
変わり果てた幼馴染みの凶行は、バギルの心を傷め続けた。
「――長居は無用だ。」
レウ・デアはレウ・ファーの本体を収納し終わると、マントの背中から二本の長い角の様な突起を現した。
残り四体のレウ・デアも同じ様に角を出した。

それぞれの先端は更に二本に分かれ、薄い皮膜がその間に広がっていた。
皮膜は赤く発光し、レウ・デア達の体を宙へと浮かび上がらせた。
と、共に、皮膜からは突風が放たれた。
赤い皮膜の羽ばたきの様に巻き起こった風圧は、広間に居る者全てを容赦無く薙ぎ払っていった。
「行くぞ――。」
レウ・デアの懐から一本の触手がザードへと差し伸べられた。
ザードは触手のぬるぬるとした質感に一瞬眉をひそめたが、そのままそれを手にした。
「ザードォォッッッ！！」
荒れ狂う風の前に立ち上がる事も出来ず、バギルはただ叫ぶだけだった。
「いっ、行くなぁぁっ！！待ってくれ！ザードッ！」
声を限りに叫び、喉の奥に熱塊が溜まっているかの様な気がした。
どれ程絶叫し、呼び止めても、バギルの願いはザードには届いていなかった。
惨めに床に這いつくばり、去り往く幼馴染みの姿すらまともに見る事は出来なかった。
レウ・デアの触手の一閃が広間の天井を突き破った。
彼らが空高く去っていくにつれ、吹き荒れる風は次第に弱まっていった。
「ザード……。」
ようやく起き上がれる様になり、バギルが天井に開いた穴を見上げた時には、既に彼らの姿は無かった。

◆

間近に聳える神国神殿本殿を横目で見ながら、レウ・

デア・・レウ・ファーは、つい今しがた自分の神殿で行った計算を実行する事にした。
「――行け。」
本体の収まったレウ・デアの命令を受け、残り四体のレウ・デア達はそれぞれの方角を目指して飛びさって行った。
幻神の能力――その優秀さと、差別を受け続けてきた歴史は、レウ・ファーにとって都合が良かった。
自分が六百年望み続けてきた事――それが、もうすぐ叶う。
レウ・ファーは黒いマントと肉管の中にくるまれながら、喜びに眼球を細めた。

第5章「脅迫」

神国神殿のある神州大陸から、船で二時間程の海上にハルバルン島があった。
輝く太陽と碧緑の海の恵みを受けるこの島は、また、豊かな温泉郷としても名高かった。
神国から手近な距離に位置している為に、神々や人間達の恰好の保養地として、この島は古くから利用されてきたのだった。
この島には、予言神の神殿があった。
それは、妖しい紫紺の光を湛える右目と、黄金の輝きを放つ左目をもって、世界の全てが潰えさる遙かな未来の果てまでをも見通す神。
時間の流れすらもが尽き果てて、虚無の彼方へと崩れ往く様を知り得る神。
何者の未来も、この神の眼力から逃れる事は出来なかった。
その神霊力によって、彼は若くして、あの最も古くに生まれ、最も貴い女神ゴレミカと肩を並べる程の高位の神々の一柱に名を連ねていた。
その神の名は――予言神サイト・ライト。
だが、彼は、その予言の力を使う事はほとんど無かった。

◆

＞ｉ３７９１９―４７５０＜

人の掌程の大きさの、赤と黄色の花の咲く木々に覆われたその丘からは、暖かな海流が巡るヒルデン海がよく見下ろせた。

丘の上から島中を見渡す様に聳える青い円塔、それがサイト・ライトの神殿だった。
抜ける様な紺碧の空がそのまま映り込んだかの様な、爽やかな青色の石材で彼の神殿は建てられていた。
三階建ての円柱状の建物は、一階の部分が参拝者を迎え入れる大広間となっていた。上の階はサイト・ライトの住まいとして使われていた。
予言神の神託を求めて押し寄せる参拝者達も一通り片付き、サイト・ライトは神殿の二階に引っ込むと、応接間で食事の用意を始めた。
時計を見ると正午を幾分過ぎていた。
「サイト様、どなたか来られるのですか？」
可憐な声が花と蔓の文様を彫刻した扉を叩き、同じ顔の二神の少女が応接間へと入って来た。
テーブルの上には食器が四人分。中央には大き目の皿に果物やパンが並べられていた。
少女神達は不思議そうにそれらを見比べ、二神揃ってサイト・ライトを振り返った。
同じ顔をしているといっても、やや背が高く、亜麻色の髪を後ろで二つに結わえている方が姉のファレス。
姉よりは小柄で、短く髪を切りそろえたおかっぱの少女が妹のファリア。
彼女達はサイト・ライトに仕えている夢想神候補だった。神々の間の扱いでは巫女と言う事になっていた。
夢想神候補――神々と人間とが共存しているこの世界で、「神の候補」という表現は些か奇異に受け取られるかも知れない。
だが、この場合での「神」とは、生物学的な種としての「神」ではなく、「神格」と呼ばれる社会生活上の概念としての「神」の事だった。

このファレスとファリアの双子は元々は別の神だったのだが、サイト・ライトの下で仕え、「何々の神」という称号を新たに獲得しようというのだった。
「――お客さんが来るんだよ。」
サイト・ライトは双子の頭を順に優しく撫でながら答えた。
双子達の前髪の流れる隙間に、眉間に縦に薄く走った小さな亀裂が見え隠れした。気にしなければ、それは皺位にしか見えない事もなかった。
「大切なお客さんがね。」
付け足された言葉に、ファレスとファリアの瞳が輝いた。
サイト・ライトにとっての大切な客というのは大変に限られていた。しかも、神殿の主自らが食事の用意をしてまで迎える客というのは、その中でも更に限られていた。
「ねえねえっ、サイト様！いつ来るのぉ？」
皿を並べ終えたサイト・ライトの腕に、ファリアが甘える様にすがり付いた。
「もうすぐだよ。」
微笑みながら答えるサイト・ライトに、
「もうすぐっていつ？予知して下さい。」
ファレスの方は幾分大人染みた仕草で不満げに口を尖らせた。
「そーよ、そーよっ！」
双子の騒ぎ立てる声は、来客を知らせる呼び鈴の音に静まり返った。
＞ｉ３７９２０―４７５０＜
呼び鈴が鳴り終わった次の瞬間には、ファレスとファリアは慌ただしく応接間を掛け出していった。

◆

応接間の扉の向こうから騒がしい声が戻って来た。
ファレスとファリアの間に挟まれて、赤茶けたローブを羽織った長身の青年神がサイト・ライトの前へと姿を現した。
後ろだけ伸びた亜麻色の髪を無造作に結わえ、規則正しく筋目の折り込まれた長衣姿で、青年は恭しく頭を下げて挨拶をした。
濁った膜のかかった彼の額の瞳が、サイト・ライトの微笑む顔を映し出した。
彼は幻神だった。
「やあ――ラウ・ゼズ。久し振りだね。」
「はい。あなたもお変わりの無い様で。――妹達がお世話になっております。」
ラウ・ゼズはサイト・ライトに勧められ、テーブルへと腰を下ろした。
それを挟む様に、ファレスとファリアもゼズの横の席に着いた。
妹――とは言うものの、自然発生する「独り成り」の幻神達の間には、他の神々や人間の持つ血縁関係という概念は当て嵌まらない。
そもそも、幻神の様な「独り成り」の種族は、レイライン集束点から時々発生する「卵」とでも呼ぶべき、生命エネルギーの素になる塊から誕生していた。
一度に発生する「卵」は一神分のみで、その「卵」から神が誕生するまでの年月もまちまちだった。
ゼズ達の場合は、一度に三神分の「卵」が発生し、先にゼズが生まれ、それから百年程の間をおいてファレスとファリアが生まれたという珍しい例だった。
この為に、彼らは互いに兄妹の様な心の繋がりを抱い

ていたのだった。
>i37922—4750<
「——神国の様子はどうだい？」
旧友の神々を懐かしんでいると言うよりも、サイト・ライトの問いは、幾分、ゼズを心配している様な感情が滲んでいた。
妹達を予言神の下へ預け、ゼズ自身は神国神殿で創作や学究の日々を送っていた。
神国には様々な神々が集まっていた。
——寛容な神も、偏狭な神も。
幻神の様な「独り成り」の神々への差別は神国神殿の方が無くなってきているとは言え、時に一部の卑劣な神々の嫌がらせや蔑視を受けると言う事もあった。
「相変わらずですよ。」
ゼズは笑いながら言った。
>i37921—4750<
世界の神々の中心。神々の調和と安定の象徴。
その神国神殿の平和が乱されているところだという事など、彼らは知る由も無かった。
取り立てて賑やかな会話を交わす事も無く、緩やかな緊張の空気に食事の席は包まれていた。
緩やかな緊張・・ゼズとサイト・ライトの間には、お互いに年齢が近いにも関わらず、時に師弟の間柄の様な空気が生じる事があった。
「——クレチカ様はご健在かな？」
生地に木の実を混ぜ込んだ丸パンをかじりながら、サイト・ライトは今度は本当に懐かしみの思いを込めてゼズに尋ねた。
「さあ——。また、何処かを旅しているかも知れませんね……。」

穏やかな青年の顔もまた、自らの師匠でもあり、自分達兄妹の育ての親でもある不老の神を思い、懐かしさに目を細めた。

幻神ラー・クレチカ。

ゴレミカより幾らか遅れた、しかし古い事には間違いの無い時代に生まれた――最初の幻神。

青年の姿のまま、一向に衰える事の無い不老の容貌を持ち続ける白髪の老神。

ゼズよりもサイト・ライトとクレチカとの間に、むしろ友人の様な気持ちの繋がりがあったのだった。

三つの瞳の全てを閉じる事で、己の莫大な神霊力の殆ど全てを封印していると言われているクレチカ。

本来ならば、無限の可能性によって無限に枝分かれしている未来の一切を見通し、世界の真の終末の未来の時をも知り得る筈のサイト・ライト。

神の身であっても巨大と言わなければならない能力を抱えて生きていかなければならない者としての、奇妙な同類意識がこの二神の間には流れていた。

それ故、ゼズが妹達の幻神としての神格を捨てさせる決心をした時、彼女らの保護者となり夢想神としての神格を与えるという申し出を、サイト・ライトは行ったのだった。

神格を捨てる。――これはしばしば差別や迫害を受ける神々が、自分達の身を守る為に行う事だった。

ファレス、ファリアの場合も、幻神としての神格を捨て、第三の目を捨て、他の有力な神の庇護を受けたのだった。

◆

食事を終え、ゼズはファレスとファリアに引っ張られる様にして島の散歩へと連れ出されてしまった。

「ねえねえ！浜に行きましょっ！」
「昨日、沢山花が咲いたのよ！」
サイト・ライトの神殿を後に、めいめいに騒ぎ立てながらファレスとファリアはゼズを挟んで丘を駆け降りていった。
「お、おいおい。そんなに慌てないでくれ。」
走る勢いに飛ばされそうになる帽子を押さえ、ゼズは息を切らしながら妹達のペースに合わせた。
走り回る生活とは無縁のせいか、ゼズの足腰はすぐに悲鳴を上げ始めた。
ちら、とゼズが後ろを振り向くと、久し振りの兄妹の触れ合いを、微笑ましいといった表情で見守っているサイト・ライトの姿があった。
昼下がりの陽光は、島の一日の中で最も勢い盛んなものだった。
神州大陸とその周辺は、春夏秋冬という四季の区別のある気候帯に位置していた。だが、このハルバルン島はやや南方に近い事と、温かい海流の流れを受けている為に、冬の寒さとは殆ど無縁の温暖な気候を誇っていた。
真夏ではなくとも、昼間は暑さに汗を拭う事も珍しくはなかった。
「早く早く！」
日差しを受けて白くきらめく砂浜を前に、走るよりも殆ど歩いている様なゼズを、双子は急き立てた。
なだらかな坂道を行き交う観光客の中には、ごくたまに幻神に対して奇異の目を向ける者があった。
そしてまた、この島の主であるサイト・ライトが幻神と連れ立って歩いている事への驚きの目。
神国神殿での生活で長らく忘れかけていた蔑みの視線に、ゼズは妹達に気付かれない様に溜め息をついた。

そうする内にも、芳しい香りを放つ灌木の茂みと、肉厚の海浜植物の花畑を越え、ゼズ達は砂浜へと辿り着いた。
赤やピンク、黄、白の、太陽の光のイメージをそのまま花弁へ留めた様な、鮮やかな色の花が白い砂浜を埋める様に咲き誇っていた。
帽子を脱いで座り込んだゼズの側で、ファレスとファリアは花を摘んで籠を編み始めた。
「これ、この島のお年寄りに教わったのよ。」
器用な手付きで、ファレスは色違いの花とその茎を順番により合わせていった。
「神殿によくお参りに来る人なのよ。」
ファレスよりは多少無器用な手付きで編みながら、ファリアが付け足した。
「――島の住人は仲々親切だ。私がよく教育しているからなー。まあ、私の神徳の成せる業というところか。」
笑いながら、やっと浜辺に着いたサイト・ライトがゼズの横へと腰を下ろした。
「まあっ、サイト様なんて天気予知位にしか島の人にアテにされてないのよ。」
「それはそれは。」
ファレスの指摘に、ゼズは小さく吹き出した。
この場の誰もが心休まる、穏やかな瞬間だった。
「・・・・・・・・・・・・？」
ゼズとサイト・ライトは、俄に表情を引き締め顔を上げた。
不意に、彼らの背筋に寒気が走った。
気温が下がったのだろうか？
浜辺に降り注ぐ鮮烈な陽光は変わらないのに、周囲に寒々とした気配が満ちていった。

ゼズの頬を伝う汗は、いつのまにか冷や汗へと変わっていた。
冷たく、昏い空気と共に、何かが、この浜辺へと現れようとしていた。
「――来い。」
立ち上がり様、ゼズは素早く呟いた。
ゼズの掌に一点の光が灯り――瞬時にそれは肉の鱗に覆われた二枚の羽を持つ、流線型の不思議な生き物を出現させた。
幻獣シウ・トルエン――ゼズの創り出した幻獣の中でも自慢の一体だった。
シウ・トルエンは主の思念を受け、主の妹達を守るべく、その長い体で彼女らの周囲を取り巻いた。
「ねえ……。一体どうしたのぉ？」
兄達の突然の表情の変化に、ファリアは不安気に立ち上がった。
ファレスもまた、表情にこそ不安を出さなかったが、作りかけの花籠をきつく握り締めてゼズを見た。
「来る。……客が、もう一神。」
サイト・ライトは身構えた体から力を抜いた。
全く有り難くない客。
紫紺と黄金の瞳が、射抜く様な視線を放った。
視線の先は、その客が出現する場所だった。
何者が訪れるのか。――その者が何を成し、神国に何をもたらすのか。
これから始められ、そして終焉を迎えるその全てを、瞬時にサイト・ライトは見通した。
彼は厳格な表情のまま、佇んでいた。
彼はただ、知る事しか出来なかったのだった。
――レウ・デアが、自分達の目の前に現れる事を。

◆

「――レウ・デアか。……何の用ですか？」
見知った神の姿を認め、ゼズは一息ついた。
――だが。ゼズもサイト・ライトも――ファレスとファリアを守るシウ・トルエンも、決して緊張を解く事は無かった。
自分達の目の前にいるのは、本当にレウ・デアだろうか。
悪意や敵意――およそ、この明るい陽光の下には似つかわしくない、昏く冷たい気配。
今迄ゼズ達が、何度か神国で目にした事のあるレウ・デアからは感じた事は無いものだった。
「幻神よ……。」
禍々しい気配を湛えた白磁の仮面は、強い日差しの中でも尚暗い影を帯びていた。
何の抑揚も感じ取れない、無機的な合成音が呼び掛けて来た。
「優れた力を持ちながらも、虐げられてきた……哀れな神よ……。」
長身のゼズを見下ろし、レウ・デアは傲然と近寄って来た。
「私は、この神国に独り成りの国を作る。――ついてはお前にも来てもらおう。」
レウ・デアの言葉を聞きながら、サイト・ライトは黙然と立ち続けていた。
流れ行くべき所へ流れ行く。
無限の可能性による、無限に枝分かれした様々な形の未来。
彼はその全てを見通す――結局は、それだけの神に過ぎないのだった。

彼は、ただ見守る事だけしか出来なかった。
「ラウ・ゼズよ。お前の返事は不要だ。――さあ、来るがいい。」
ゼズの拒絶の意思は、主の感情の変化を受けたシウ・トルエンが示した。
威嚇に翼を広げ、体中に鋭利な輝きを帯びた突起物が現れていった。
ゼズは冷たい一瞥をレウ・デアへと向けた。
「優秀なる機械神よ。これは一体どの様な故障でございましょう？」
ゼズの眉が困惑に歪んだ。
国を作る――神国に！
それは、侵略に他ならなかった。
「故障などではない事は、そこな予言神がよく分かっておる。――話してやったらどうかね？何を見たのか。」
黒衣の懐から伸びた斑模様の触手がサイト・ライトを指し示した。
サイト・ライトは立ち尽くしたまま黙っていた。
レウ・デアはゼズの眼前に立つと、ゼズの顔を覗き込んだ。
「考えてみろ……。お前が何故、妹達をサイト・ライトに預けなければならなくなったのか。――お前達幻神はいわれのない蔑みや侮辱を、これからも受け続けるつもりなのか？」
瞳の無い筈の仮面の切れ込みに、卑しい光が宿っていたのをゼズは感じた。
様々な感情の動きを分析し、レウ・デアは容赦無くゼズの心の奥へと入り込もうとしていた。
ゼズは努めて冷静さを装い、目の前の白い仮面を睨み付けた。

「妹達の事には触れないで頂きたい。――これは、私達の問題だ！」
レウ・デアの仮面は相変わらず何の表情も浮かべてはいなかった。
レウ・デアは尚も言葉を続けた。
「お前の能力に相応しい見返りは与えよう。――お前の生き甲斐とする幻獣の創造。お前の知らぬ知識や技術を与えてやろう……。」
「――早々にお引取り願おう！これ以上、戯れ言に付き合うつもりは無い！」
ゼズは言葉を荒らげた。
そんなゼズの剣幕にも怯んだ様子は無く、レウ・デアはゼズ達の背後で震えるファレスとファリアに顔を向けた。
「取引を持ちかけている内に承諾した方が・・妹達の為になる。」
レウ・デアの言葉が終わるや否や、ゼズの額の瞳がきつく見開かれた。
創造主の激情に反応し、シウ・トルエンは翼を広げレウ・デアへと襲いかかった。
だが――。
「――――ッッ……！！」
――ゼズ達が耳にしたのは、シウ・トルエンの悲鳴だった。
突然斑模様の触手が地面を突き破って出現し、シウ・トルエンは呆気無く絡め取られてしまった。
新たに地面から生えた触手は更に、次の獲物へ狙いを定め、揺らめいた。
「お、お兄ちゃん……。サイト様……。」
ファレスとファリアは互いに抱き合い、震えて立ち尽

くすばかりだった。
「さあ、決断を。」
レウ・デアは、何の感情もこもらない声でゼズを促した。
触手の中でもがくシウ・トルエンと、怯えた目で震える妹達をゼズは交互に見比べた。
――一瞬の逡巡が、ゼズには永遠の様に感じられた。
レウ・デアへの限りない憎悪を湛えて、額の瞳に力強い光が灯りかけたが――それは、すぐに萎えて消え去った。
妹達に、毛筋程の傷も付いてはならない。
その為には、ゼズは確実な方法を取らなければならなかった。
「分かった。……お前と共に行こう。」
ラウ・ゼズの答えに、レウ・デアは頷いた。
それと同時に、シウ・トルエンに絡まっていた触手も地面へと吸い込まれていった。
「サイト・ライト様、妹達を頼みます……。」
ゼズの願いに、サイト・ライトは穏やかな口調で応えた。
「ああ……。任せてくれ。」
ゼズはサイト・ライトの返事に満足の笑みを浮かべると、まだ震えているファレスとファリアの所へと歩み寄った。
「また……来るよ。」
いつものゼズの別れ際の挨拶だった。
「……また、ね……。」
ファレスが震える声を気丈に絞り出し、強張って――泣きだしそうな微笑みをゼズへと向けた。
ゼズは妹達を背にすると、レウ・デアの方へと歩き出

した。
不思議と、激しい屈辱感は起こってはいなかった。
妹達を思う一方で・・自分の生き甲斐を満たすレウ・デアの申し出に、惹かれる心の動きもあった。
ゼズは、相変わらず無表情のまま自分を見つめる白い仮面を、冷たく睨み付けた。
レウ・デアの申し出に心を動かされている、自分の浅ましさをごまかす様に。
「では、行こうか。」
レウ・デアは、絡まり合って腕の形を作る触手をゼズへと差し出した。
ゼズはレウ・デアを睨んだまま、その手を取った。

第6章「誘惑」

豊かに広がる森の中の一か所だけが、黒い染みの様な色に変質していた。
そこでは、幾千もの年月を経た無数の大木は黒く焼け焦げて、無残な骸を晒すばかりだった。
墓標の様に立ち並ぶそんな木々の残骸の間を、水の香りを含んだ一陣の微風が漂った。
「――ひどい……。」
今にも掻き消されそうなか細い声が、聞く者もいない焼け跡に響いた。
炭化して異臭を放つ下草を踏みしめ、その女神はやって来た。
手には、水の流れを模した優美な紋様を彫刻した錫杖が握られ、柔らかな肢体は薄紅の衣を纏っていた。
きつく波打つ豊かな髪は、彼女の足元まで届こうとしていた。
彼女は南の方位と、水を司る女神――ラノ。
清らかで汚れない水を司り、大地に豊かな水の恵みをもたらす女神。
司る水そのままに、美しく清らかな乙女――と、人間達は讃えた。
神州大陸の南に浮かぶ、チェルロ大陸の中央に位置するラシル湖の畔に彼女の神殿はあった。
チェルロ大陸は、水の女神ラノの祝福を受け、豊かな水と緑に恵まれていた。
火事の現場は、ラシル湖一帯を覆う森の一部だった。
「――人間共の火の不始末だな。」
低く深い響きのある女の声がラノの背後で起こった。

ラノがその声に振り返ると、左肩から生えた花の蕾が目に入った。
「ええ――。幸い発見が早くて、すぐに火は消えたのだけれど……。」
樹木の連想そのままの長身に、左肩の赤味がかった花の蕾。彼女を見た者は、誰もが植物に関する女神だと思うだろう。
だが、右だけが長いおかっぱの髪――その間から見え隠れする額にあるのは、見る事とは無縁の濁った瞳だった。
ロウ・ゼーム――彼女もまた、幻神の一柱だった。
「焼け跡も、またいい……。次の緑の芽吹きを感じさせてくれる……。」
誰に言うともなく茫洋と呟き、ロウ・ゼームは傍らに聳える黒焦げの木の幹へともたれ掛かった。
炭化し、固く変質した幹を愛しげに撫で、ゼームは目を伏せた。
掌を通じ――彼女は巨木の死体から何かを感じ取っている様にも、ラノには思えた。
「木も草も花も――、何も死にはしない。……枝葉を分かち、種を蒔き。――同じ命を、違う体で分け合っているの。」
再び開かれた瞳はラノを見つめ、吟ずる様な調子で言葉を紡いだ。
緑に関する事で、この女神に見通せない事は無いのだろう。
ふと思い浮かべた事をも見抜かれ、ラノは友の力に畏敬の念を抱いた。
＞ｉ３７９２４―４７５０＜
親しくはあっても、しかし、友は自分からは遠く離れ

た智慧と理法の中で生きている事を、ラノは折りに触れて思い知らされてきたのだった。
「ゼーム……。あなたに、この場所の再生をお願いするわ……。」
ラノの願いを、ゼームは微笑を浮かべながら聞いた。
「森を作るのは、神や人の図らいではない。……芽生えるものは芽生え、枯れるものは枯れる。」
「ゼーム……。」
ラノは溜め息をついた。
「はははは……。」
思いの外、朗らかな声で笑い、ゼームはラノの前へとやって来た。
「火事の前の状態の復元で構わないかしら？」
ゼームの問いに、ラノは微笑みながら頷いた。
気紛れとも言い難い、不可思議な受け答えの後、ゼームはその場へと屈み込んだ。
消化剤や水の匂いの残る黒い地面へと手を押し当て、ゼームは両目を閉じた。
額の瞳だけがきつく見開かれ・・強い輝きが宿った。
ラノの見守る中、ゼームは愛しむ様な調子で大地へと囁き始めた。
———陽射しの中、揺れる陽炎の下
水を呼び、種を呼び、お前は踊る
雨に謡を誘い
命を潤す為に———
それは、植物の生命力を活性化させる、「言魂」と呼ばれる詩だった。
低く柔らかな余韻が地面へと吸い込まれて消えた。
「言魂」の詠唱が終わると同時に、焼けて死に絶えたはずの森の何もかもがざわめき始めた。

草木の残骸から起こっているのではなかった。
風が吹いている訳でもなかった。
大地の奥から、泉が湧き出るかの様に、そのざわめきは生じていた。
やがて――ざわめきと共に、無数の柔らかな萌葱色の若芽が、焼け跡の黒い色彩に取って代わった。
春の訪れを思わせる明るく柔らかな緑から、さほど時間を置かずに、濃く硬質の艶を帯びた色調へと森の中は塗り変えられていった。
知らぬ者は何一つ区別の付かない発芽したての草の群は、節くれだった幹を持つ木へと、可憐な小花を咲かせる下草へと、それぞれ変貌していった。
幾度か「言魂」が繰り返され、短い時間の内に巨樹の連なる森林は復活した。
森の甦りと共に、不思議なざわめきは消え去り、辺りには静寂が戻った。
「ゼーム？」
友の姿は生い茂る木々の間に埋もれてしまっていた。
ゼームの呼吸一つ聞こえず、ラノの耳に入るのは木々の梢を揺らす風の音ばかりだった。
ラノは不意に、取り残されてしまった迷子の様な心地になった。勿論、この森は自分の領地で、迷う事など有り得なかったのだが。
「ゼーム？いないの？」
ラノはもう一度呼び掛け、目の前に広がる藪を掻き分けた。
その向こうに、ゼームは佇んでいた。
巨大な楠の土瓶状に肥大した根元に、もたれ掛かっているゼームの姿があった。
ラノの声に顔を上げ・・薄く開けられた目が向けられ

た。
俄にはラノは声を掛けかねた。
濃緑の下草に絡み付かれるまま、ゼーム自身も一つの樹の様な風格を持って、そこに在った。
薄い紅の差す左肩の花の蕾が、木漏れ日に浮かび上がっていた。
真新しい巨樹を背後に従え、幾億幾兆もの年月を、そこで過ごして来たかの様に。
「ゼーム……。」
自分の呼び掛けに微笑む表情に、ラノは何故か安堵の様なものを抱いた。
自分より僅かに年の若いこの幻神は、しかし、遙かに年を経た神々と同じだけの智慧を持っているのだろう。
親しい筈の友の、時折感じさせる捉え所の無い・・深く遙かなものへと通ずる資質は、ラノに不安と寂しさを抱かせた。
「本当は、成り行き任せが一番いいのだが……。」
「そうね……。」
無造作に体を起こすと、ゼームはラノの方へと進み出た。
その拍子に、ゼームに絡み付いていた下草が次々にちぎれて足元へと散らばった。
ちぎれた草に、一瞬憐れみの表情を浮かべたのは、むしろラノの方だった。
「喉が渇いた……。神殿に戻ってお茶にしよう。」
肩の蕾を撫でながら、ゼームは森の静謐そのままの穏やかな笑みを浮かべた。
「ええ。」
ラノもまた、優雅な微笑をもってそれに応えた。
◆

森の何処に何の花が咲いたか、とか、今年の木の実の実り具合は、とか。
そんな話をしながら、ラノとゼームは森の小道を神殿へと帰っていた。
「ラノの神殿」と、矢印の付いた立て札のある所に差しかかったところで――優雅な水の女神には似つかわしくない、険しい表情で背後を振り返った。
澄み切った水の中に一滴の汚水の落とされた様な、突然の気配の変化をラノは感じ取った。
森の清浄な空気の中では、余りにも目立ち過ぎる・・垂れ流しの邪気。
「――何者だ？」
穏やかな、しかし不快と嫌悪の色の滲んだ口調でゼームは尋ねた。
二神の目の前に、突然黒煙が渦を巻いた。
音も無く煙は人の背丈程に膨れ上がり――すぐに流れ去った。
現れたのは、漆黒のマントを纏った機械神の使者。
目深に被ったシルクハットの下からは、青白い影を落とす無表情の仮面が覗いていた。
レウ・デアは、黒衣の裾から見え隠れするぬめった触手を揺らしながら、ラノとゼームへと近寄って来た。
ラノは本能的に後ずさり、その前にゼームが庇う様に立った。
レウ・デアと会うのはどちらも初めてではなかった。
何度も神国神殿で会い、言葉を交える機会も勿論あった。
だが、今、目の前に現れた機械神レウ・ファーの遣いは、二神の知っている様なレウ・デアではなかった。
「――去れ！見知らぬ神の分身よ……。貴様の邪な神霊

力はこの森を脅かす。」
　レウ・デアの歩みを断ち切るかの様に、ゼームは冷厳な言葉を投げ掛けた。
「――独り成りの神々へ知らせがある。」
　レウ・デアは、ゼームの警告を無視し、そのまま歩み寄って来た。
「去れと言ったのが聞こえなかったのか？」
　ゼームは肩から伸びた一枚の葉をちぎり取った。
「如何なる神であろうとも――森を脅かす者を、私は容赦せぬ！」
　葉はゼームの掌中で輝き始め、変質していった。
＞ｉ３７９２５―４７５０＜
　金属的な光沢を帯び、一枚のありふれた葉は長剣へと変えられた。
　剣の切っ先が仮面の顎先へと突き付けられ、レウ・デアは歩みを止めた。
　ゼームの背後でラノは、強張った表情のまま成り行きを見守っていた。
「――私は独り成りの国を神国に作る。お前も来るがいい……。」
　レウ・デアの傲慢な口調に、ゼームとラノは眉をひそめた。
　だが、レウ・デアはゼーム達のそんな表情を気にした風も無く話を続けた。
「今迄蔑まれてきた独り成りの者達が団結し、新しい国を興すのだ……。」
「下らんな。」
　ゼームは葉の剣を下げ、表情一つ変えずに言葉を吐き捨てた。
　国を建てる事や、独り成りへの差別など――神々や人

間達の行為など、ゼームにとっては最も縁遠い事柄に過ぎなかった。
「――私は、知っているぞ……。」
レウ・デアの仮面の瞳が、ゼームを真っ直ぐに見据えた。
意図も、感情も窺い知る事の出来ない無表情の白い仮面――その、細く切れ上がった部分に過ぎない筈のそこに、不気味な輝きが宿っている様な感覚をラノは抱いていた。
「ロウ・ゼーム……。お前の心の奥底。……お前の本当の願い――いや、野望を。」
レウ・デアの誘惑の言葉にも、ゼームは一向に耳を傾けはしなかった。
ゼームもまた、その真意を窺い知る事の出来ない、ただ穏やかなばかりの表情で佇んでいた。
「それを――叶えてやろう。」
「やめてぇっ！」
ラノは思わず悲鳴の様な声を上げた。
自分の友を唆し、誘惑し・・何か恐ろしい取引を、レウ・デアは持ちかけている。
ラノの体は悪い予感に震えた。
「――レウ・デアよ。これ以上、我が領地に留まる事、許しません。早々に立ち去りなさい！」
だが、ラノの命令にも冷酷な一瞥を向けるだけで、レウ・デアは、ゼームへの言葉を続けた。
「神や人ではないものの幻夢から生まれた幻神よ――。そこな水の女神を初め、どの様な神でさえもお前の智慧や想いを理解は出来まい。」
初めて、ゼームに驚愕の表情が浮かんだ。
ラノなどの、ごく一部の親しい神々しかゼームの出自

を知る者はいなかった。
レウ・デアはどの様にして緑の幻神の誕生の由来を知る事が出来たのだろうか。
神や人ではない――植物の見る夢と幻を元にして、ゼームは誕生した。それは独り成りの幻神達の中でも特異で――また、他に例の無い孤独な出自とも言えた。
「私は、今やこの世界の全てを知り尽くし――全知全能の神となった。既に一介の機械神などではない！お前の智慧と想いを理解し、お前にすら未知のものを与えられるだろう！！」
レウ・デアの傲慢な宣言を聞いた後、ゼームは呆れた様な笑いに唇の端を歪めた。
レウ・デアの宣言を聞く内に、驚愕の感情は治まっていた。全知全能とうそぶくこの神の器の底を、ゼームは見通していたのだった。
「それで……、私に与える代わりに、私もお前に何かしなければならないのだろう？――何の取引をするというのだ？」
もうやめて――レウ・デアとゼームのやり取りを見つめるラノの言葉は、彼女の白く細い喉元で止まった。
彼らが必ずしも邪悪というのではなかった。
ただ――この地上の神や人の営みから遙かに離れた地平に、ラノの目の前の二神は立っていたのだった。
余りにも関わり難く、口を挟む事すら出来ない空気がゼームとレウ・デアを包み込んでいた。
その空気に隔てられ、ラノは初めて目の前の友が、自分の全く見知らぬ異形の神であるかの様な錯覚に捕らわれた。
ラノはただ、呆然と立ち尽くす事しか出来なかった。
「私は本来、神でも人でもない理法の住人。……私の思

いも行為も、――私の持つ智慧も、貴様の様な機械神如きの図らいの内にあると思うなっ！」
長い年月を経た古神の威厳と矜持を内に秘めたかの様な、緑の幻神の、傲慢な機械神に対しての宣言だった。
それは、ラノの見知らぬ、激しさと強さを内包するゼームの表情だった。
そして、ラノは直感した。
自分と共に森を愛し、育む術を司るこの友は、しかし決して自分の傍に居続ける事は出来ないのだと。
「私とお前の願うものはまるで違う……。」
全てを見通すかの様なゼームの鋭い視線が、白磁の仮面を射た。
ゼームの峻烈な宣言にも視線にも、レウ・デアは動じた様子は無かった。
「そう――違う。違っていていいのだ。――私の目的を果たす為には、今の神国の秩序を混乱させ、破壊する必要がある。――お前にはその為に来てもらう必要があるのだ……。」
神国に属する神々の一柱として、決して聞いてはならない言葉をラノは聞いた。
神国の混乱と破壊――――
現実となるのならば――それは、地上の生ある者全てにとっての、絶望的な破滅に等しかった。
レウ・デアはもはや、ラノ達神国の神々にとって、この地上に災厄をもたらす邪神の遣いでしかなかった。
だが。ゼームは、そうした破滅へと連なる誘惑の言葉に、何の感情も示してはいなかった。
むしろ――それを楽しむかの様な妖しい笑みを浮かべていた。
レウ・デアもまた笑ったのだろうか。

軽く体を揺すり、ぬめった触手をゼームへと差し出した。
「お前は、お前の心のままに行動すればいいのだ。――私の下で。」
レウ・デアを見るゼームの声が、辺りに冷え冷えと響き渡った。
「――面白い。」
ラノは再び、聞いてはならない言葉を聞いた。
すぐ目の前にいながらも、自分の声はゼームへとは届かないかも知れない。
そんな感覚を抱きながらも、ラノはゼームへと懇願した。
「ゼーム……。そんな者の言葉に耳を貸さないで。自分が何をしようとしているのか分からないの……？」
ゼームは、自分を見つめる水の女神の悲しみに満ちた澄んだ瞳を見た。
神や人の常識や理法の外にいるとは言え、友を思うゼームの気持ちは他の者達のものと変わりは無かった。
出会って後、長い間を共に森を育み慈しんできた友。
心を通わせてきた友との別れを、ゼームは選択しようとしていた。
鈍い重みを伴って、別離への未練はゼームの心へのしかかっていった。
レウ・デアにか、ラノにか。
ゼームはどちらに語りかけるでもなく、口を開いた。
「――私は、この地上全てに深き緑をもたらす神。私の願いはただ一つ。……山も、大地も、砂漠も、全てが深き緑に沈む事。」
ゼームの願いを聞きながら、ラノは思い知ったのだった。

共に森を育む術を司っている、この愛すべき友は――やはり、神や人の属する理法の中では生きてはいないのだと。

例え、レウ・デアの訪れがなかったとしても。

いずれは、ゼームは自分の側ではない何処かへと旅立って行ったのだろう――。

「――さらばだ。」

ラノは自分でも信じられない程の穏やかさを胸に、ゼームの別れの言葉を聞いていた。

友情と、野望と。

ゼームの中でそれらは等しい価値を持ち、どちらを選択するかの躊躇は大きく――だが、等しい故に、決断は早かったのだった。

ロウ・ゼーム――地上の全てを深き緑に沈める神。

ラノは何処かで気付いていたのだろう。

ゼームが司っているのは、水や風の様な森を育む術ではなく――森の命の在り方そのものだという事に。

人が荒野を開拓し、町を広げていく様に――草木もまた、森の無限の拡大を求めていたのだった。

天を衝く巨木は更なる高みを目指し、地表を覆う草花はより広大な土地へと広がっていく。

何者の善悪も関係は無かった。

それは――草木の命の営みの本質であり、それこそが草木の従うべき理法に過ぎないのだった。

「……では、行こうか。」

レウ・デアの呼び掛けに頷く事も無く、ゼームはそのまま歩き始めた。

「ゼーム……。」

最後の未練の様に、ラノはひっそりと声を掛けた。

ゼームは、森を慈しむ時と同じ眼差しでラノを振り返

った。
二神はそれ以上、言葉を交わす事も無かった。
突然に、進む道を違える時が訪れてしまった。が、それは互いを裏切るのでも欺くのでもなかった。
ゼームの行先がレウ・ファーの下でなかったならば。
痛切な、祈りにも似た願いがラノの心に溢れたが、それは結局空しいものでしかなく――ゼームは再びレウ・デアと共に歩き始めた。
ラノはただ、ゼームの無事を祈るばかりだった。

第7章「悪夢」

神国のある神州大陸を西に進んだ所にガザ大陸はあった。
南北に弓なりに伸びたこの巨大な大陸は、この世界で最大の大陸だった。
その大陸の北端――サモラ山脈もまた、神や人が滅多に足を踏み入れない場所の一つだった。

◆

濃緑の針葉樹の生い茂った山肌の一点を裂く様に、一軒の館があった。
薄暗くくすんだ様な周囲の山々の色彩にそぐわない、赤や黄の極彩色で館の壁はでたらめに塗られていた。
窓も扉も無いその建物の中に、悪夢を司る幻神リウ・ファイオが住んでいた。
派手な外観に反して、館の中は、黒ずんだ深みのある光沢を帯びた木目の壁と床で構築されていた。
小さな箪笥や丸いテーブルといった、幾つかの古びた家具が慎ましやかに部屋の片隅に置かれ――壁には絵の無い額縁が掛けられていた。
館の中は薄明るい光で満たされ、全ては夢の様に茫洋と霞むばかりだった。
ファイオは館の一番奥の小さな部屋で、独りソファに身を沈めていた。
しばらくの間、彼は何を思うでもなく宙に視線をさまよわせていた。
＞ｉ３７９２６―４７５０＜
「――今日は何を作ろうかしらン。」
肩まで掛かる黒髪を指先で弄びながら彼は呟いた。

ほっそりとした白い顔立ちに、鮮やかな真紅のルージュ――その唇から漏らされた声は、低く野太いものだった。
精神の集中につれファイオの瞳に妖しい炎が揺れ、額の第三の瞳にも力強い輝きが宿っていった。
両手が、胸元の空間を捏ね回す動作をした。
やがて、幾筋かの煙が昏い灯火を明滅させ、ファイオの掌中に一つの形ある物が生まれ出た。
体中に棘を持つ、流線形の物体。
それはファイオの手の中で小刻みに蠢き、繊指がなぞる度に細部の形を変えられていった。
棘の幾本かは、攻撃性の象徴そのままに長い刃へと変化し――別の幾つかは、より細く鋭く伸びていった。
幻獣創造――これは、幻神の持つ能力の一つだった。
自らの思念を実体化させる能力により、幻神は幻獣と呼ばれる擬似的な生命体を創造する事が出来た。
「アンタの名前は――。」
完成した幻獣は、創造主によって名前を与えられるとその手の中から空中へと滑り出た。
幻獣には知能や、まして、自分の意思などは存在しない。
創り出されたばかりの幻獣は、何処へ行くでもなく、ただ、ファイオの周囲を気儘に浮遊するだけだった。
一つの創造を終えると、ファイオは満足気に息をついた。
だが――すぐに、その細く白い貌は不満や怨みを秘めて強張っていった。
孤独な境遇への不満。孤独な生活を送らざるを得なかった事への怨み――。
ファイオに限らず、幻神などの独り成りの神々は、孤

独な生活を送る者が多かった。
一部の高慢な神々から差別され、また人間達からも差別される事のある独り成りの神々は、ファレス、ファリアの姉妹の様に有力な神の庇護を受けるか、ファイオの様に人跡未踏の土地に引き籠もって隠遁生活を送る者が多くを占めていた。
「――ちッ！」
＞i３７９２７―４７５０＜
自分の目の前を漂う幻獣の尾が頬を掠め、ファイオは苛立たしげに幻獣を掴み取った。
ファイオの白い指先に力がこもり――幻獣は呆気無く歪んで潰れてしまった。
生クリームを連想する幻獣の中身が飛び出し、古びた木目の床の上に滴り落ちた。
「うっとおしいわネッ。」
ファイオは無慈悲に自らの創造物を床に叩き付け、再びソファに身を沈め直した。
粘り気のある白いクリームを垂れ流し、幻獣は床の上で惨めに痙攣を続けた。
さほど時間を置かず、幻獣の動きは止まり、一筋の白煙を上げながら消滅していった。
煙に混じって、微かな呻き声や恨み言、叫び声が耳に届いたが、ファイオは全く気にも留めなかった。
怨嗟の声は、幻獣の発したものではなく――その材料となったものだった。
ファイオはラウ・ゼズと違い、神や人の負の心――憎悪や怨念などといった精神エネルギーから幻獣を創り出す技術に長けていた。
その為か、幻獣達の姿は剣や棘といった突起物を纏う事が多かった。

幻獣――それは文字通り、幻神達の幻想から創造された仮そめの獣に過ぎない。
奇妙で奇怪な姿を持って現世に誕生したそれらは、限り無く生物的ではあっても、生命体ではなかった。
いわば幻獣とは、幻神の作る実体化した幻覚の延長、或いは変形したものでしかない。
一個の本能や、知能――また、自我を備えた命あるものを創造する事は、幻神の業ではなかった。
「――全く、イヤになっちゃうわネ……。」
野太い声が、薄い光に満たされた室内に響いた。
その声が紡ぐ言葉は全て、己の境遇を嘆く愚痴と、他の者への恨み言だった。
神や人の負の心から幻獣を生み出す幻神は、自身もまた負の心で満たされていたのだった。
独りの自由気儘な生活と気取ってはみても、神も人も近寄り難い土地での生活は、耐え難いものだった。
誰かに強制されたものではなかった。
しかし、自ら望んだものでもなかった。
ただ、ここで暮らさざるを得なかった――それだけの事だった。
ラウ・ゼズが妹達をサイト・ライトの下に預けなければならなかった様に。
独り成りという己の生まれや境遇を嘆き、憤り――ファイオの中でそれらは既に、他者への怨念や憎悪に変貌していた。
――いつか、自分の創った幻獣を従えて、世界を滅茶苦茶にしてやる。
そのいつか、を夢想しながら、ファイオはきつい紅色に彩られた唇を歪め、残酷な笑みを浮かべた。
「――そのいつかを、今……与えようではないか。」

何処とも知れない場所から響いてくる声に、ファイオは驚愕の余り立ち上がった。
主の警戒心に反応した幻獣達が、何処からやって来たものか、ファイオの周囲に壁の様に群れを成した。
神や人の暗い悪夢で満たされた館の中を、更に黒く暗く染め変えていく気配がファイオの目前に形を結んだ。
床も家具も、茫洋と霞む薄明かりの中にあって、無表情の白磁の仮面だけが、闇を纏って佇んでいた。
毒々しい邪気を垂れ流し、黒いマントを翻して傲然と歩み来る機械神の分身。
それは、ファイオよりも、悪夢から生み出された幻獣達の主に相応しいと言えた。
「あぁら！――神国のお偉い機械神サマが、こんな所に何の用かしらン？」
レウ・ファーの分身、レウ・デア――名前と簡単な素性くらいはファイオも知っていた。
さほど危険そうではないと感じ、ソファに再び身を沈めると、嫌悪の表情を露にファイオは毒づいた。
神々と人間の寛容に基づく共存を旨としながらも、神国はファイオのこの境遇をどうする事も出来なかった。
そんな神国など、ファイオにとっては偽善と無能の象徴でしかなかった。
「リウ・ファイオよ……。私は神国に、独り成りの者達の国を作る。お前も来るがいい。」
レウ・デアの話に、ファイオは嘲る様に吹き出した。
「あらあらン。ステキなお考えですコト！」
だが、レウ・デアはファイオの反応に何の感情も示さず話を続けた。
「今ある神国の神々による秩序を全て踏みにじり――我々の為の国を建てるのだ……。」

神々を――踏みにじり。
その言葉はファイオの興味を惹いた。それは、ファイオがいつも夢想していた事に他ならなかった。
互いの名前を知っているに過ぎない間柄で、今、館を訪れたばかりのレウ・デアは、一体いつファイオの心をくすぐる言葉を計算したのだろうか。
「へぇええ？仲々オモシロイ事を考えるのねエ。」
初めてレウ・デアの話に興味を持った様子で、ファイオはソファから身を起こし、レウ・デアを見た。
「とんだ神が、神国の中枢に巣食ってたもんだワ。」
ファイオはレウ・デアの実力を伺うかの様に、鋭い眼光を湛えて目を細めた。
「これは、挨拶代わりだ。」
レウ・デアのマントの裾から数本の触手が伸び、獲物を狙う蛇の様に幻獣達に躍りかかった。
「何ヨッ！？」
主を守るべく群れを成していた幻獣達は、次々と、レウ・デアの触手に捕えられていった。
瘤の様な器官や肉のパイプ。電子回路の様な模様の細かい筋を表面に纏い、レウ・デアの触手によってファイオの作品は、より凶悪で怖ましいものへと変化させられていった。
「私には力も、技術も知識も――無限に備わっている。お前の望みを叶えるくらい、造作も無い事。」
絡まり合った触手が腕の様な形を成し、ファイオへと差し出された。
そのぬるぬるとした質感にファイオは一瞬眉をひそめたが、
「随分とオモシロイ事するじゃないの――気に入ったワヨ。」

既に自分の作品とは言い難い異形の怪物達を、ファイオは満足そうに見下ろした。
「では、行こう。」
マントが翻り、濡れた光沢を放つ幾本かの触手が揺れた。
神や人を踏みにじり、彼らの悪夢から創造する幻獣の群れを思い描きながら、ファイオはレウ・デアの後を歩き出した。

◆

神国――神州大陸の南に広がるヒルデン海。
船乗りや、或いは大陸南岸やハルバルン島の住人達の間に、一つの話が伝わっていた。
雲一つ無い晴れた日には、青空の彼方を渡る城が見える――。
実際に見上げてみると、それは薄灰色にくすんだ小さな円盤としか見えないものだった。
勿論、それは空を巡る三つの月のどれでもない。
神国の老神達は、ありふれた社会科の知識としてその正体を知っていた。
――空中城塞都市ラデュレー。
天空の高みを悠然と飛翔する円盤は、古い時代に捨てられた神々の都市だった。
全長数十キロに及ぶ巨大な空中都市は、かつては太陽や月、星などを初めとする天体に関係する神々の住居として使われていた。
七千年程前に放棄され、住民も全て下界の神国神殿へと下りて行き、今では住む者もいない。
都市に使われている建築材料自体が半永久的な浮力を持っている為に、住民のいない今も、空中都市の名に相応しい天界の漂泊を宿命付けられていたのだった。

七千年の天の放浪の末、神々の住んでいた街並みは崩れ去り、都市の中央に座す神殿だけがかつての名残を辛うじて留めていた。
その神殿の展望台の上に、物憂げな様子で佇む少女の姿があった。
肩で切り揃えられた赤毛はきつく波打ち、黒瞳は果てし無く広がる天の平原を眺め続けていた。
「昨日も独り、今日も独り――――。」
つまらなさそうに呟く少女の顔が、長衣の両肩に縫い付けられた大きな水晶玉に映じた。
「明日も独り――か。」
＞i３７９２８―４７５０＜
愁いを帯びた溜め息は、容赦無く降り注ぐ太陽のきつい光の中に掻き消えた。
彼女はこのラデュレーで誕生した幻神だった。
ラデュレーが幻神の誕生するレイライン集束点に差しかかった時、幻神の「卵」が偶然起こった空間歪曲の為にラデュレーへと飛ばされてしまった。
飛ばされた「卵」はラデュレーで幻神を産み落としたのだった。
独り成りの神々は、幼児期の学習や教育を殆ど必要としない。放置された状態でも、一定の水準の知能や自我を発現させるのである。
彼女もまた、独りでに生まれ、独りでに自らの意識を形作った。
彼女は自分を、ミウ・パラと名付けた。
幸いな事に、ラデュレーの神殿に残された図書や、辛うじて動く旧式のコンピュータによって、パラの知能の発達と自我の形成は神国の一般的な神々の水準に達していた。

そして――不幸な事に、コンピュータは下界の知識を多くの映像や音声を伴ってパラに与えたのだった。
下界に生きる神々や人間達の日々の営み。
多くの生命の息づく大陸や海洋、多くの島々――
様々な生命が互いに関わり合い世界を形作っていた。
パラが、純粋な興味と憧れを持って地上に降臨する事に、一体何の不思議があるだろうか。
しかし、幻神故に疎まれ、彼女を受け入れる者も無く――天空に生まれた幻神は、再び自らの城塞へと逃げ帰ったのだった。
自分一人が、世界中の何もかもから切り離され、たった独りで生きている。
時間だけを無為に食い潰し、二百年以上が経ってしまったのだった。
パラの中で、地上への憧れはそのまま憎しみへと変わってしまった。
「――憎しみを晴らす術を与えようではないか！」
更に空の高みから、パラへと降り注ぐ声があった。
この無人、無神の筈の天空で自らを呼ぶ声に困惑しながら、パラは顔を上げた。
その視線の先に、漆黒の影があった。
鮮烈に輝く太陽を背に、マントをなびかせて浮かんでいる白い仮面の神。
上空を荒れ狂う気流に翻るマントは、羽の羽ばたく様な動きを見せていた。
その内側からは、日差しを受けて不気味な光を返す触手と肉の管が、吐き出された内臓の様に垂れ下がっていた。
「あなたは、誰……？」
レウ・デアの異様な姿に驚いた様子も無く、パラは不

思議な物でも見る様に尋ねた。
「私はレウ・ファー。――この世界を支配すべき大いなる神。この体はレウ・デアという分身だ。」
答えと共にレウ・デアは展望台の上へと降り立った。
べしゃ、と、湿った音がパラの耳へ届いた。
「お前の孤独、憎しみ、怨み――。私は何でも知っている。」
パラを見つめる白磁の仮面。仮面自身はただの物体に過ぎない筈なのに、その鋭い視線を感じ、パラは魅入られた様に立ち尽くした。
「私の憎しみを晴らすって――一体どうやって？」
パラの問いに、レウ・デアは触手の腕で眼前の雲海を指し示した。
「この世界の神々の中心地、神国――そこに、我々は独り成りの国を興す！我々を蔑み、傷付け、差別してきた者達の全てを――今度は、我々が踏み潰すのだ！」
レウ・デアの呼び掛けは、甘美な幻想を伴ってパラの心に染み渡った。
下界で自分を傷付け、受け入れなかった者達を踏み付け――その上に君臨する。
「――このラデュレーを私に譲れ。我々の望みを果たす為の根城とする。」
パラに否定の返事は無かった。
「――おっしゃる通りに……。」
その答えに、レウ・デアは無表情の仮面を頷かせた。
そのままパラには目もくれずに、黒いマントを翻して展望台の階段へと足を向けた。
「直に、志を同じくする者達がここへ集まる。」
薄暗い階段を降りて行くレウ・デアの後ろ姿が、薄闇の中へと溶け込んでいった。

パラはそれを見失わない様に、慌てて後を追った。

第8章「深い闇」

パラを引き連れてレウ・デアがやって来たのは、神殿の大広間だった。
天井に開かれた半球状の水晶の窓からは、柔らかく濾過された太陽の光が降り注いでいた。
かつては全てが純白で満たされ、壮麗な空間を作り出していたのだろう。
広間の壁も、大理石の柱も、黒ずみと亀裂の為に見る陰も無かった。
円形の広間の壁には、東西南北の全方位に向けて扉が作られていた。
それぞれの扉の向こうから響いてくる足音が、パラの耳に届いた。
「皆、着いた様だ。」
レウ・デアは、広間の中央にある円形の祭壇へと歩いていった。
四つの扉の前で足音はやみ――黒ずみ、ひび割れた白亜の扉が押し開けられた。
ヒウ・ザード、ラウ・ゼズ、ロウ・ゼーム、リウ・フアイオ――四体のレウ・デアに導かれ、幻神達は広間へと足を踏み入れた。
既知の顔、未知の顔をそれぞれに認めながら、幻神達は互いに言葉を交わす事も無く、祭壇の前へと歩いていった。
幻神達を導いてきたレウ・デアは、五体全てが壇上へと上った。
「――蔑まれ、疎まれてきた幻神達よ……。」
どのレウ・デアが言葉を発したものか。

広間に硬質の合成音が響く中、ヒウ・ザードと共に来たレウ・デアが、祭壇上に咲く巨大な黄金の蓮華の上に屈み込んだ。
祭壇の中央に咲く巨大輪の華は、幾千年の時の流れにもその輝きを失ってはいなかった。
かつての天空神達がどの様な祭式を執り行っていたのかは、この場ではレウ・ファーしか知らない事だった。
レウ・デアは黄金の蓮華の上に座すと、身に着けていたマントとシルクハットを脱ぎ捨てた。
肉の管と触手、機械部品の奇怪な寄り集まりが、形ばかり、意思ある者を装うかの様に、白磁の仮面を頭部に頂いていた。
蓮華の上のレウ・デアに続き、それを取り囲む他のレウ・デアも漆黒の衣装を脱ぎ捨てた。
「――我々が、独り成りの国を建て――神国の愚かな神々に報いる時が来たのだッ！」
レウ・デアの声を、幻神達は呆然と聞いた。
自分達を空中都市へと連れて来たこの神は、これから一体何をしようと言うのだろうか。
五体のレウ・デアの仮面に、同時に幾筋もの亀裂が縦に走った。
そこからは墨汁の様な漆黒の体液が噴き出し、祭壇上を汚していった。
蓮華に座すレウ・デアの仮面のひび割れの中から、一つの眼球が覗き、ゆっくりと這い出して来た。
触手に覆われた一つ眼の脳が、亀裂の間から姿を現すと、レウ・デアの体を滑る様に伝い下りていった。
一つ眼の脳――それはレウ・デアの本体、レウ・ファーの真実の姿だった。
――びしゃっ。

レウ・ファーが蓮華の中へと収まったと同時に、五体全てのレウ・デアが体液にまみれた肉体を、湿った音を撒きつつ崩壊させた。
まとまりを失った肉の管と触手の塊は、蛇の様にのたうちながら祭壇の石材へと食い込んでいった。
黒血にまみれた何かの内臓の陳列を連想し、ファイオとパラは吐き気を催して、祭壇から顔を背けた。
二神に一瞬、同情の目を向けるも、ゼズは冷たい憎悪を湛えた瞳でレウ・ファーの怖ましい儀式を見つめていた。
ゼームは一人、茫洋とも冷静ともつかない表情で、面白くもなさそうに佇むばかりだった。
幻神の中で、ザードだけが、残酷な笑みを浮かべてレウ・ファーの変わりいく様子を眺めていたのだった。
やがて――黄金で出来ている筈の蓮華は、次第に閉じ始めた。
レウ・ファーの姿は、幾重にも折り重なる金の花弁の中へと呑み込まれていった。
黄金の蓮華は、異形の脳髄の神を内部に含み、小さな蕾へと戻ったのだった。
幻神達の視線が注がれる中、僅かな時間、朽ち果てた広間を静寂が支配した。
――それはすぐに破られ、黄金に輝く蕾は、卵が孵るかの様に蠢き始めた。
薄汚れてくすんだ広間に金の光を投げ掛ける蕾は、花弁を固く閉ざしたまま巨大化していった。
幻神達が驚愕をもって見つめる中で、蕾を形作る花弁には、葉脈ではない不可思議な筋が幾本も浮き出ていき――一枚、また一枚、と綻んでいった。
金属の質感はそのままに、花弁は別の物へと変質して

いた。
広がる花弁の内と外には、模様めいた平面的な眼球が現れ、薄く柔らかに輝いていた花弁の内部に神経配線やパイプが通されていった。
華――と言うよりも、巨獣の殻、或いは巨大な幻獣の様だと居並ぶ幻神達は思った。
巨大輪の妖華の開いた後、誰もが見慣れた白磁の仮面が姿を現した。
仮面を頂上に戴き、ずるずると、重く濡れた物が擦れ合う音を撒き散らして――レウ・ファーの新しい肉体は花弁の中から屹立した。
電子回路を思わせる筋模様があちこちに浮かび上がった甲殻。その隙間から無数にはみ出した肉の管と触手。
縦に裂けた胸元から覗く――血走った一個の眼球。
全長五十メートルもあろうか。
レウ・ファーは、それ自身が魔物の男根柱の様な威容をもって、水晶の天蓋を突き破らんばかりの勢いで広間に聳え立った。
ファイオとパラは、レウ・ファーの力と姿に、ただ呆然とするばかりだった。
ザードはそんな二神に蔑む様な一瞥を与え、レウ・ファーの変化を満足気に見上げていた。
ゼズはただ、嫌悪感に表情を強張らせるだけだった。
驚愕も嫌悪も無く――、ゼームはただ、冷たさすら感じさせる表情で成り行きを見つめていた。
「――中身は同じ、ただの脳髄か……。」
淡々と呟いたゼームの言葉を、一体誰が聞いただろうか。
「我々は……。」
耳障りなノイズが僅かに起きた後、鮮明な合成音が広

間に響き渡った。
「我々は、我々を見下して来た者達を、今度は我々が見下すだろう。――神国に独り成りの国を建て、それを実現するのだ！！」
幻神達は確かに聞いた。
眼前に聳え立つ異形の魔神が、声高に神国の破壊を宣誓するのを。

◆

神国神殿――正確には本殿。
その巨大な建物の中の一室に、幾神かの神々が密かに集っていた。
本殿はその巨大さ故に、神々の居室の他に会議室や庭園、大浴場、ありとあらゆる施設が混在している。
その為に忘れ去られ、捨てられた部屋や広間も少なくはなかった。
＞i３７９２９―４７５０＜
彼らが集まったのは、そんな部屋の一つだった。
「――皆さん、お集まりの様ですね。」
灰色がかった茶色の髪を後ろで無造作に結んだ青年神が、明るい花柄で満たされたソファへと腰を沈めた。
品の良い若草色の背広で身を固め、穏やかな表情で部屋を見渡す彼の暗緑の双眸は、しかし鋭い眼光を湛えていた。
神国の日々の秩序を司り、神々と人間の営みを守る護法庁――若くしてその長の一人に名を連ねる護法神、紫昏だった。
壁紙もソファの布地も、明るい花柄で統一された居間を思わせる一室に、神々は硬い表情で次々に席に着いていった。
過去と哀しみの神、ゴレミカ。灼熱神、バギル。南方

の水神、ラノ。予言神、サイト・ライト。夢想神候補、ファレス、ファリア。経理神、サナリア。書物の神、エトラージュ。
大神レウ・ファーの暴走と、幻神達の失踪に関係した神々だった。
この事件は、まだ表沙汰にはなっていなかった。
「――まず、あたくしから報告しますが。」
疲れ切った表情で、サナリアは手元のリモコンのスイッチを入れた。
神々の取り囲むテーブルの上に、幾つかの資料が立体映像として映写された。
映像を指し示すサナリアの眼は、徹夜の為に赤く腫れていた。レウ・ファーに荒されたコンピュータの復旧作業の為に、ただでさえ肌荒れの多いサナリアの肌はすっかりと色艶を失っていた。
「暴走時、レウ・ファーは神国の全ての機関、組織のデータを荒らして持ち去って行ったわ。御丁寧にプログラム破壊のおまけまで付けて……。」
しきりに頬を撫でつけ、肌の具合を気にするサナリアの後に、紫昏が言葉を続けた。
「今の処、公式には大規模なウィルス発生によるコンピュータの暴走と発表しているが。――いずれにせよ、被害は甚大ですな。」
被害総額の概算は既にサナリアによって計算され、立体映像の資料の中に書き込まれていた。
「――レウ・ファーの暴走か……。」
そわそわと体を揺すりながら、バギルは落ち着かない様子で立体映像に目を走らせていた。
だが、映像を見ながらも、バギルの紅い瞳は、レウ・ファーと共に去って行った幼馴染みの優しい笑顔を見て

いた。
レウ・ファーに洗脳されて、連れて行かれてしまったザード。
一刻も早く見つけ出し、元に戻したい――バギルの心の中はそれだけで占められていたのだった。
「暴走？――発狂でしょ？」
柔らかな響きを含みつつも、発せられた言葉には険があった。
先だけがカールした豊かな黒髪をいじりながら、サナリアの隣に座っていた女神が溜め息をついた。
書物の神エトラージュ。彼女もまた――、自身の管理する世界最大の蔵書量を誇る知の殿堂、神国国立図書館のコンピュータをレウ・ファーによって破壊されたのだった。
数の上では他の機関と比べて恵まれているとは言い難い、全ての職員を総動員し、徹夜で復旧作業に励む姿は鉄血の経理神サナリアに劣るものではなかった。
「発狂ではありません……。覚醒、です――。」
ただ一神、ソファに腰を下ろす事も無く佇んでいたゴレミカが口を開いた。
滅多に他の神々の前にも姿を現さない最古の女神は、居並ぶ神々の注視を浴びながら、言葉を続けた。
「虚空の深淵より生まれ出でし、独り成る神……。あの神の本性は、邪悪……なもの。この地上の世界の秩序とは、決して相容れない者なのです……。」
吟ずる様な調子で紡ぐゴレミカの言葉の中で、うわべだけの言葉では表現し難い思いがある事を、サイト・ライトだけが看破した。
天と地と海と、冥界と、虚空と。
様々な神々が溢れ返るこの世界で、一つの秩序や理法

に属していないからといって、どうしてそれが即、邪悪だと言い切れようか。
「邪悪――か。そうだな……。」
紫紺と黄金とを放つ双眸が、僅かの間宙空を漂い、サイト・ライトは溜め息をついた。
「独り成りの国を作る為に、レウ・ファーは幻神達を誘惑、ないし脅迫して自らの下へ付かせた。――今の処、護法庁はこう認識しているが……。」
紫昏が伺いを立てる様な口調だったのは、天と地と海――そして冥界、虚空の中で並ぶ者無き最古、最貴の女神と、それに劣らない器を持つ予言神の列席に緊張していた為だった。
護法庁の長――いや、「奥の院」に名を連ねる長老、古老達ですら、この女神の前では空しい肩書を背負うだけの赤子に過ぎない。
「――――それで差し障り無いかと。」
暫くの沈黙の後、ゴレミカはそう呟いたきり、再び沈黙した。
それから僅かな間を置いて、ゴレミカの沈黙を慎ましげに破る、水の女神のたおやかな顔が上げられた。
「……わたくしは、まだ彼らを、大事な友と思っております。」
深い憂愁に、透き通る様な顔を曇らせ、ラノは遙か遠くへと去っていった緑の幻神を想った。
「彼らはレウ・ファーに洗脳され、或いは脅迫されているのですわ……。彼らが一日も早く解放される事を願ってやみません。」
目に涙を滲ませ、切々と語るラノの姿は神々の胸を打った。
「そうよ！お兄ちゃんだって、あたし達を助ける為に連

れて行かれたんだからっ……。」
ラノにつられる様に涙ぐみ、妹の手を掴んだままファレスは呟いた。
「――いずれにせよ、レウ・ファーは行動を間も無く起こすだろう。神国を滅ぼす為に……。」
既に見えていた、何もかも。
この双子の兄が何をなすのか。この双子の身の上に何が降りかかるのか。
或いは、何もなさず、何も起こらないのか。
全て等しく起こり得る未来は、一つの方向へと少しずつはっきりとした形を持ちつつあった。
神々は、黙ってサイト・ライトの言葉を聞く事しか出来なかった。

◆

悲鳴を上げたのだろうか。
幻獣の体が大きく痙攣したのは、レウ・ファーの体組織の爪の様な一片が食い込んだ為だった。
鋭い鉤爪の様な体組織の先端は、容赦無く幻獣を貫いて別の物へと変貌させていった。
幻獣の緩やかな流線型の体のあちこちで、金属室の光沢と電子回路の様な筋を持つ肉塊が膨れ上がった。
肉塊を鎧の様に纏い、体を起こすそれは、もはや幻獣ではなかった。
レウ・ファーの不滅の生命力を誇る細胞に侵され、別の存在へと塗り変えられてしまっていた。
「――邪神の様だな。太古、ヌマンティアの神々が創り出したという……。」
さして興味を示す風でもなく、広間の壁にもたれたままゼームは呟いた。
「では、これは邪神と呼ぼう。我が力で生まれ変わった

今、幻獣などではない。」
レウ・ファーの白磁の仮面が、邪神と化した幻獣を見下ろした。
間近で幻獣の変化を見ていたザード、ファイオ、パラ達は、邪神の出来映えに満足気に頷いた。
「何が……っ、何が邪神だッッ！」
耐えきれずに発せられたゼズの怒号に、一瞬広間は音を失った。
握り締めた拳を震わせ、ゼズの怒りと憎悪の視線は邪神とレウ・ファーとを射抜いた。
象程にも巨大化した幻獣の成れの果てを指差し、忌々し気に叫んだ。
「破壊し、傷付けるだけの化け物ではないかっ！幻獣をこの様にして、一体何をするつもりだっ！」
だが、レウ・ファーはゼズを一顧だにせず、何の感情もこもらない声を放った。
「お前の幻獣までは変えはせぬよ。――だが、余計な口を挟むな。」
レウ・ファーの言葉に反応し、邪神の刃状の腕がゼズの喉元へと瞬時に突き付けられた。
「……。」
広間の空気が、長い間凍り付いた様な錯覚があった。
ゼズの頬を、緊張の汗が一筋伝わり落ちた。
「――着いた様だ。」
下界の様子を知らせる立体映像が、不意にレウ・ファーの前に結ばれた。
幾らかの緊張感を残しながらも、広間に佇む幻神達の関心は、下界の映像へと移っていた。
幻神達に行く先も知らせないまま、レウ・ファーは空中城塞を大都市上空へと運んでいたのだった。

「何だ……。ドミュスティルじゃないか。――神国神殿近くにいきなり来るなんて、命知らずもいい処だね。」
ザードが呆れた様に溜め息をついた。
神国――神州大陸南岸の都市ドミュスティル。神国神殿からさ程遠くない場所に栄える、神々と人間の住む大都市だった。
ザード達の頭上に広がる立体映像の中で、緑豊かな都市の中を横切るケニ川の流れがきらめいていた。
「邪神はこの様に使う。――見ておれ。」
既に、ゼズの喉元からは刃は引かれていた。
レウ・ファーの命令を受け、邪神は広間から出て行った。

◆

ヒルデン海に程近い平野に、無数の高層建築と住宅とが広がっていた。
放射状に広がる道路に貫かれた都市は、上空から見ると、円盤状の区画で構成されていた。
神々と人間とが混在し、共存する街。
豊かなケニ川の流れを抱き、緑濃き木々に包まれた街は、雑多でとめどなく溢れる活気で満たされていた。
神国神殿の様な荘厳で浄寂な神域のある一方で、この街もまた、確かに神国の景色の一つを形作っていた。
こうしたドミュスティルの街の広がりと比べて、そこに降下した邪神一体は、余りにも小さかった。
しかし、神国にありふれた街の一角に邪神が降り立つとすぐ――警戒と混乱とが怒濤の様に住民の間へと広がっていった。
神々、人間、妖精、精霊――様々な生物が街を行き交い、様々な姿の神と人間とが生きるこの街で、邪神の垂れ流す邪気は余りにも目立ち過ぎた。

邪神は暫く、赤茶けた煉瓦敷きの道を移動し――然るべき位置を定めると、そこで停止した。
エビの様な体を丸め、邪神がうずくまると、その背から数本の角が現れた。
角は細く鋭い光を放ちながら、空高くへ掲げられた。
そうする内にも、邪神の下半身は鋭角的な変化を遂げ――地面へと潜り込んでいった。
そして――それっきり、邪神は完全にその動きを停止した。
警戒しながら遠巻きに眺める神々や人間達の目には、毒々しい巨大な茸の様にも映った。
呼吸と思しい体の収縮もやまり、邪神の表面には鏡の様な光沢が宿り――瞬く間に硬化していった。
身じろぎ一つしなくなった邪神を不審な目で眺めながら、神々や人間達は不安気にざわついていた。
そんな彼らの頭上に近寄る重々しい音があった。
幾千年の天の放浪を支える反重力の石材の放つ、特殊な波動だった。
唸る様な音に気付いて顔を上げると同時に、ドミュスティルの街並みを照らす太陽が、円盤に遮られるのを彼らは見た。
空中城塞都市ラデュレー。
天空を渡る古代の都市が、建ち並ぶドミュスティルの建物の群れへと真円の影を落とした。
『――我々を差別してきた者達よ。』
天上の都市から落とされた声に、神々と人間達は、不可思議な幾何学模様の走るラデュレーの基底部を呆然と見た。
青い筈の空に、見えない染みの様な暗黒が広がっていく気配を彼らは直感した。

確かに――空は、青く晴れ渡っていた。
だが、その空の一点に広がる昏い気配は、ドミュスティルの街の真上に――白い仮面の神の姿をもって顕現した。
無表情の白磁の仮面――神国の者ならば、誰もが知っているレウ・ファーの顔だった。
『我が名はレウ・ファー。虚空の深淵より立ち現れし、独り生まれ出で独り成る神。』
誰もが見知っている筈の機械神は、今や、誰一人知る事の無かった素性の異形の神として、街並みを睥睨していた。
『我々を、独り成りの故に蔑み、貶めてきた他の神々や人間、妖精、精霊――およそ、知恵ある全ての者共に、我は宣言する。』
レウ・ファーの宣言を、ラデュレーの中で幻神達もまた緊張の面持ちで耳にしていた。
『我は、この神国に独り成りの国を建てる。神国による秩序の一切を滅ぼして。――我々は、我々を貶めた者共を、今度は我々が貶めるだろう！』
レウ・ファーの宣言は驚愕と戦慄をもって、神々と人間達の心臓を凍り付かせた。
彼らは、昏い闇の流れの中に属する独り成りの神の宣戦布告を、はっきりと聞いた。

◆

レウ・ファーの映像が消え、ラデュレーが自分達の頭上から遠ざかっても、住民達はその場に釘付けになっていた。
長い時間、白い仮面と天上から降り注ぐ昏い声は彼らの心を苛み続けた。
ドミュスティルを後に、ラデュレーは再び高度を上げ

て飛翔を始めた。
「何故、一気に侵略を始めないのですか？」
ちぢれた赤髪を掻き上げ、パラは遠ざかり行くドミュスティルの映像を不思議そうに眺めた。
パラの横で、ファイオもまた不満気な表情だった。
彼らを見下ろす事すらせず、レウ・ファーは冷たい合成音を響かせた。
「――混乱と、破壊が必要なのだ……。ただの武力制圧では意味が無いのだ。」
肉の管と触手の絡み合いで形成されたレウ・ファーの腕が、空中の立体映像を掻き消した。
「それに、現在、我々には武力も不足している。――まだまだ準備が必要だ。」
片方の掌を広げ、レウ・ファーはファイオ達に差し出した。
爛れや虫食いを連想させる模様をした表皮の上に、邪神の立体映像が浮かび上がった。

◆

都市ドミュスティルで行われたレウ・ファーの宣戦布告は、数秒と経たずして神国神殿の神々の知る処となった。
レウ・ファーの反乱は隠蔽しようの無い事実として、世界に知らしめられた。
「――これはまた、大したオブジェを置いて行ったものだな。」
神国神殿から直行した紫昏は、溜め息をついて邪神を見上げた。
レウ・ファーは行動を起こすだろう――神国神殿の一室でサイト・ライトの言葉を聞いて暫くの後、ドミュスティルでの出来事が報告されたのだった。

忙しく動き回る警官の神の一神を捕まえて、紫昏は邪神の様子を尋ねた。
事態はまだ、過激派の示威行為の域にも達してはおらず、紫昏の出番ではなかったのだったが。
「これは紫昏様――。」
中年の警官は恐縮しながら、調査したての事柄を紫昏に報告した。
接触透視能力者――サイコメトラーの報告によると、この物体はレウ・ファーが邪神と呼んでおり、その表面は、レウ・ファーの組織によって極端に硬化した状態にあるという。
下半身は数百メートルの地下へと伸び、引き抜く事も破壊する事も不可能――と。
「何の為にこんな物を街の真ん中に置いていったのか、また、この邪神の能力や性質などは不明です。」
「分かった。御苦労。」
警官はまた、忙しそうに仕事へと戻って行き、紫昏は再び邪神を見上げた。
サイコメトラーの透視では、単純に物質の性質や内部構造などの透視だけに留まらず、どういう目的や経緯が背後にあるのか、どんな者が関わっているのかまでが分かる。
透視が妨害されているのか、或いは・・見えていてもそれと、認識出来ないか……。
様々な神々の溢れる神国では、そんな事態もまた、ありふれた事だった。
一つの神の思惑や、見聞きしたものが、必ずしも他の者に認識されるとは限らなかった。
「おい、紫昏っ！空中都市はどっちへ行ったっ！？」
関係者以外立入禁止と押し止める警官達を押しのけ、

紅気を纏った気配が紫昏の背後に迫って来た。
「バギルか。あれは、正確には空中城塞都市ラデュレーと言うそうだ。」
呑気に使用名称の統一を図る紫昏の背広の襟首を掴んで、バギルはぜいぜいと息を切らしながら、
「ンなこたぁ、どおでもいいんだっ！そのラデュレーは何処へ行ったっ！？」
瞬間移動で送ってもらった紫昏とは違い、バギルは神国神殿から空を飛んで来たのだろう。
赤褐色の髪は風圧でぼさぼさに乱れていた。
その小脇には、「ゴレミカ」のサインの入ったスケートボード程の大きさの飛翔板が抱えられていた。
「ドミュスティル南方に向かい、それ以後、消滅だそうだ。――どうやら、何かのシールドが張られたらしい。レーダーにも透視にも引っ掛からない。」
紫昏の説明が終わらない内に、バギルは飛翔板へと飛び乗った。
「南だなっ！」
バギルの念を受け、一陣の突風を巻き起こして飛翔板は空高く舞い上がって行った。
必ず追い付く。
バギルは、どうしても行かずにはいられなかった。
レウ・ファーの下からザードを連れ戻す為に。
焦る気持ちをなだめつつ、バギルは空中都市の姿を求めて飛翔板の速度を上げた。
「おい、バギル――。」
青空の片隅にもはや点と化してしまったバギルに、紫昏は呑気に言葉を続けた。
「――肉眼にも映らないんだそうだが――。」

◆

頭は半円球の甲殻で覆われ、そこからは、骨を連想させるような異様に細い胴と手足とが、ぬらぬらと妖しい光沢を放って伸びていた。
レウ・ファーの手の上に映し出された邪神は、ドミュスティルへと降下させたものよりも、さらに異様で怖ましい姿をしていた。
「古い記録から再生した映像だ。――神や人の負の心から創られた幻獣を素材とした邪神だ。」
レウ・ファーの説明に、ファイオは得意気に前へと進み出た。
「それなら、アタシが得意とするものだワ。」
レウ・ファーは邪神の映像に、仮面の目を落としたまま、次の映像へと切り換えた。
「心の奥底に存在する暗黒――心の「深い闇」……ここから採取される精神エネルギーが、邪神の為の幻獣創りに最も都合が良い。」
レウ・ファーの手に映し出されたものは、「深い闇」の採取が可能な神々の名簿だった。
「――――！」
それ迄無関心にレウ・ファーを見ていたゼームの表情に、珍しく動揺の色が掠めた。
レウ・ファーの手の上で、人形の様に並ぶ神々の立体映像の中に、ゼームはラノの姿を認めたのだった。
「一つ、尋ねたいが――――――。」
いつもの穏やかな口調のまま、ゼームはレウ・ファーを見上げた。
穏やかな――しかし、全ての物を貫き通すかの様な鋭い眼差しは、レウ・ファーの胸部の眼球へと向けられていた。
「「深い闇」の採取後、その者はどうなるのか？」

今や、レウ・ファーは神国の優秀な機械神などではなかった。
虚空の深淵からやって来た、その本性も露に、見る者全てに得体の知れない嫌悪と恐怖とを与える神となっていた。
そのレウ・ファーを臆する事無く圧し、ゼームは佇んでいた。
「――どうなるのか？」
ゼームはもう一度繰り返した。
あくまで静かな口調の中に、レウ・ファーすら圧倒しようとする気迫が見え隠れしていた。
成り行きを見守る幻神達――ザードさえもが、この女神の底知れない器に戦慄を覚えた。
「どうもせぬよ。」
緊張に強張った広間の空気は、レウ・ファーの素っ気無い合成音で破られた。
胸部の巨眼がぎょろっと動き、ゼームの視線を真っ向から受け止めた。
「「深い闇」とは、言わば汗や糞尿。流れ出た汗を持ち去った処で、何も起こりはしないであろう。」
「そうか――。」
安堵したのだろうか。
ゼームの様子には何一つ変化は見られなかった。
一度、ラノの立体映像へと目を向け――それっきり興味を失った様に広間を後にした。
「私も失礼する！その様な、醜い幻獣創りに興味は無いっ！」
ありったけの侮蔑を込めて、ゼズはレウ・ファーへと言葉を投げつけた。
ローブを翻し、ゼームとは別の扉から、ゼズも広間を

後にした。
「気が向けば、幻獣を持って来るが良い。」
足早に立ち去ろうとするゼズの背に、冷たい合成音と一枚のカードが放たれた。
「これは？」
不審気に眉根を寄せてカードを手にするゼズに、
「お前に与えると約束した資料だ。古い時代からの、幻獣創造に関するもの。好きな様に使うがいい。」
この神が口にする約束という言葉程、空々しいものをゼズは聞いた事が無かった。
やがて自分も、レウ・ファーの手足の様に使われなければならないのだろう。
未知の幻獣の知識や技術と引き換えに――そして何より、妹達の命の安全の為に。
屈辱に唇を噛みしめ、ゼズはカードを無造作にポケットに仕舞い込んで広間を退出した。
重々しく扉が閉まった後、ザードが口を開いた。
「あんな連中はどうでもいいから、「深い闇」の採取に取り掛かろうじゃないか。」
「――それなら、アタシに任せて欲しいワ！負の心なら得意だしネ！」
野太い声を張り上げて、ファイオはザードとパラを押し退けて、レウ・ファーの前へと歩み出た。
「よかろう。」
「そう――ネ。まずはこのラノとかいうのにするワ。」
ファイオは、先程のゼームの視線の先にあったものを知らなかった。
ラノが「深い闇」採取の毒牙に掛かる事を知った時、ゼームはどの様な反応を示すのだろうか。――或いは、既に興味の外の事柄なのだろうか。

ファイオはレウ・ファーから、ラノの資料の入ったカードを受け取ると、早速チェルロ大陸へと向かった。

ＰＤＦ小説ネット発足にあたって

ＰＤＦ小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は２００７年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連＝横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にＰＤＦ形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのＰＤＦ小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能（たんのう）してください。

この小説の詳細については以下のＵＲＬをご覧ください。
http://ncode.syosetu.com/n8528z/

神国　第壱部～虚しき深淵より来たる者～

2011年12月28日22時50分発行